

目次

第1日 10月17日(土)

シンポジウム I (10:00~13:00) A会場 (4階404) 1

悪の文学史 —グリム、ホフマン、カフカ、トラークル、イエリネクを道標として—

Das Böse in der Literatur – gestern und heute

司会：中村 靖子

1. グリムのメルヒェンにおける「悪」の脚色 鶴田 涼子
2. 「悪の次元」 —ホフマンの場合 Hans Michael Schlarb
3. 「悪の増殖」と共に生きること
—カフカの『あるアカデミーへの報告』における権力の問題 山尾 涼
4. 「情感の内的重力」としてのメランコリー
—トラークルの詩『啓示と没落』に見る悪と狂気 中村 靖子
5. 「悪」の意識化
—『トーテンアウベルク』におけるイエリネクの言語的戦略 福岡 麻子

口頭発表：文学・文化・社会 1 (10:00~12:35) C会場 (4階401) 5

司会：浜島 昭二、藤井 たぎる

1. 記憶の中の「歴史」 齊藤 公輔
2. フィグーラ アウエルバッハの文献学と歴史哲学 森田 團
3. 「人生が私にくれた最高のもの」 テーオドル・シュトルム
『人形遣いのポーレ』に描かれる帰郷をめぐる 中村 修
4. ハインリヒ・ベルの放送劇に見られる過去との対峙 植松 なつみ

口頭発表：文学・文化・社会 2 (10:00~11:55) D会場 (4階403) 8

司会：大庭 正春、糸井川 修

1. クニッゲ『人間交際術』とベッカー『農民のための救難便覧』
—同時代批判としての実用書— 田口 武史
2. 「ニーベルンゲンの歌」の重層構造 —シーフリト像を中心に— 山本 潤
3. ルクセンブルクの多言語教育と国民アイデンティティ 田村 建一

口頭発表：語学 1 (10:00~11:55) F 会場 (2 階 209) 10

司会：松尾 誠之、成田 克史

1. 体験話法の識別と翻訳のむずかしさについて
ーリザ・テツナーの『黒い兄弟』を例にー 鈴木 康志
2. ドイツ語における発話上のリズム調整
ー母語話者と日本人学習者の比較ー 富永 晶子
3. コミュニケーション方略としての「ボライトネス」
ー日独語比較対照の観点から 渡辺 学

ブース発表 (11:30~13:00) G 会場 (2 階 206) 12

Franz Kafkas *Das Schloß* in der Verfilmung von Michael Haneke

Hiroaki Murakami
Susanne Schermann

ポスター発表 (13:00~14:30) H 会場 (2 階 205) 13

(ポスター発表は同時進行です)

- ・ テーマの es の振る舞いとその機能 宮下 博幸
- ・ H.フォアグラの『Dir』と Barkenhoff の庭に関する考察
ーヴォルプスヴェーデの画家としての自然観 白川 茜
- ・ Fasching, Fastnacht, Karneval 「謝肉祭」の用法と分布 林 敬太

シンポジウム II (14:30~17:30) A 会場 (4 階 404) 15

神秘主義的世界像と自然科学 ーもうひとつのモデルネー

Mystische Weltbilder und Naturwissenschaften – Eine andere Moderne –

司会：福元 圭太、田村 和彦

1. フェヒナーにおけるモデルネの「きしみ」 福元 圭太
2. 生活改革運動と神秘主義 ー菜食主義を中心にー 田村 和彦
3. カール・デュ・プレルにおける科学技術と心霊研究 熊谷 哲哉
4. 「メタ心理学の魔女」再考 ーフロイトにおける科学主義と神秘主義 門林 岳史

シンポジウムⅢ (14:30～17:30) **B 会場** (4 階 405) 19

Konzepte für einen nachhaltigen Deutschunterricht:

Zur Konstruktion von reichen Lernumgebungen im Tokai-Raum

Moderation: Alexander Imig, Tomoko Okochi

1. Wochenendseminare als Lernform Sven Holst
2. Deutsch nicht nur an der Universität:
Die Rolle der Japanisch-Deutschen Gesellschaften bei Sprachkursen,
Kulturvermittlung und Austauschprogrammen Oliver Mayer
3. Aspekte von Prüfungen und Unterricht.
Das Österreichische Sprachdiplom Deutsch (ÖSD) Olaf Schiedges
4. タンデムプロジェクトの実践報告 コース設計とその成果 大河内 朋子
5. Vernetzter Unterricht
Zu einem didaktischen Paradigma für den Deutschunterricht in Japan Alexander Imig

口頭発表：文学・文化・社会 3 (14:30～17:05) **C 会場** (4 階 401) 24

司会：柴田 庄一、関口 裕昭

1. フランツ・カフカのもう一つの〈アメリカ〉
インディアン像の変遷をてがかりに 林寄 伸二
2. 表象としての「病」と「女性」 —カフカ『田舎医者』を手がかりに 寺田 雄介
3. W・ベンヤミンのカフカ・エッセイ
「反転」のモチーフが描く布置 小林 哲也
4. ベンヤミンとティリッヒに見る文化神学の可能性 宮城 保之

口頭発表：語学 2 (14:30～16:25) **F 会場** (2 階 209) 27

司会：小坂 光一、人見 明宏

1. Indefinitheit – Korpus-Untersuchung zu „man“ und bloßem Plural Gabriela Schmidt
2. 品詞転換要素としての動詞接頭辞
—授与・装備動詞派生の歴史の変遷— 黒田 享
3. 文体的効果をもたらす（不）定名詞句の選択
—Thomas Mann の„Tristan“をもとに— 住大 恭康

第2日 10月18日(日)

シンポジウムⅣ (10:00~13:00) A会場 (4階404) 29

カフカと劇場 Kafka und Theater

司会：西 成彦

1. 身体表現の発見
—カフカが観たイディッシュ演劇における身振り— 佐々木 茂人
2. 『失踪者』における「劇場」と映画的なもの 川島 隆
3. あえて見世物になるということ —断食芸人の系譜— 藤田 教子
4. 観察者の観察
—フランツ・カフカ『城』における対立する視線— 下菌 りさ
5. 『訴訟』の中の「劇場」とその翻案の問題 —カフカの『訴訟』と
ヴァイスの戯曲『訴訟』との比較を手がかりとして— 須藤 勲

シンポジウムⅤ (10:00~13:00) B会場 (4階405) 33

「文意味構造」の新展開 —ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望—

Neue Entwicklungen der „Semantischen Satzstruktur“:

Aktuelle Perspektive auf die Linguistik des Deutschen und weiterer Sprachen

司会：成田 節、藤縄 康弘

1. 意味構造と項構造
—基本関数の認定とその複合をめぐる— 藤縄 康弘
2. 「欠如・欠落」の概念と与格の実現
—「存在」・「所有」概念との接点を探る— 高橋 亮介
3. 日本語における対格の生起と「関与」の概念
—「被影響 (affectedness)」をキーワードとして— 今泉 志奈子
4. フランス語再帰構文の諸相
—モダリティーを中心に— 春木 仁孝

口頭発表：文学・文化・社会 4 (10:00~12:35) C会場 (4階401) 37

司会：福山 悟、四ツ谷 亮子

1. 「捏造」とはなにか ニコラス・ボルン『捏造』論 柊渕 博樹

- | | |
|--|--------------|
| 2. 戦後ドイツ文学はなぜ性を語ら(れ)なかったのか
K・テーヴェライトの「ポカホントス論」に触れながら | 越智 和弘 |
| 3. ヒルシュビーゲル『エス』試論 —もうひとつの近代への希望— | 木本 伸 |
| 4. Momente interkultureller Wissensvermittlung in den Kriminalromanen von Günter ZORN unter besonderer Berücksichtigung nonverbaler Elemente | Elke Hayashi |

口頭発表：文学・文化・社会 5 (10:00～12:35) D 会場 (4 階 403) 39

司会：清水 純夫、山本 順子

- | | |
|---|-------|
| 1. 『若きヴェルターの悩み』と教養小説 | 林 久博 |
| 2. なぜゲーテの『音響論』は未完に終わったか？ | 滝藤 早苗 |
| 3. アイヒェンドルフへのアプローチの可能性
—アドルノとアーレヴィンの観点の違いを手がかりに— | 水守 亜季 |
| 4. ミヒャエル・エンデのゲーテ『メルヒェン』受容
—シュタイナーによる解釈との関連を中心に— | 川村 和宏 |

口頭発表：ドイツ語教育 (10:40～12:35) F 会場 (2 階 209) 42

司会：林田 雄二、今井田 亜弓

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. Vernetzte Welten – Chancen und Grenzen internetgestützter Lehr- und Lernprozesse im DaF-Unterricht | Oliver Bayerlein
Rüdiger Riechert |
| 2. Internetgestützte Videokonferenzen, ihre Probleme und deren Beseitigung | Andreas Riessland
Tatsuya Ohta |
| 3. ユビキタス社会における外国語学習環境
Ubiquitous Computing und Fremdsprachenlernen | 藁谷 郁美
太田 達也
Marco Raindl |

第1日 10月17日(土)

シンポジウム I (10:00~13:00) A会場 (4階404)

悪の文学史 —グリム、ホフマン、カフカ、トラークル、イエリネクを道標として—
Das Böse in der Literatur – gestern und heute

司会：中村 靖子

「人を殺す経験がなかった」という動機から17歳の少年が殺人を犯した事件は記憶に新しい。この事件をドストエフスキーの『罪と罰』と比較したり、「不条理」という言葉で説明する論者もいた。その説明に対して内田樹は反論した。「不条理」というのは、少なくともカミュにおいては、正邪理非善悪の判断を下す超越的・汎通的な審級が存在しないときにあつてさえ、人はなお「適切に判断しうる」という痛々しい希望のことを言うのである」と。或いは村上春樹は、オウム真理教の元信者たちへのインタビューからなる『約束された場所で』に関連して、自分は、物語というシステムを通して「魂の新しい個人的領域」を見出そうとするのだと述べている。「その領域で、人はポジティブなものにも出会うし、ネガティブなものにも出会うことになる。そこは薄暗く危険な場所にもなり得るし、輝かしい可能性に満ちた場所にもなり得る」と。

「悪とは何か」という問いに一義的な答えを出すことは難しい。しかし文学は、悪の現象形態を時代ごとにその多様性そのまま描いてきた。文学は「魂の新しい個人的領域」を見出すためのすぐれた方途であり、その魂の領域にはポジティブなものだけでなく、必ずネガティブなものも居場所もまたあるからである——それを封印しようとすれば、封印されたものは必ず何らかの「症候」でもってその存在を表明することは、フロイトが示したとおりである——。文学自体に「正邪理非善悪の判断を下す超越的・汎通的な審級」は必要ではなく、文学は読者に、人は「適切に判断しうる」という希望を託すものなのである。

倫理を論じる際に難点となるのは「個人の自由」である。「悪」を論じたものの中でハナ・アーレントの論考はおそらく20世紀で最も影響の大きかったものであるが、そのアーレントは、シェリングでもって新しい、近代の哲学が始まったとする。そのシェリングの主著『人間的自由の本質』はちょうど200年前、1809年に出版された。それは近代的な人間観が形成されていった時期でもある。啓蒙(Enlightenment)という言葉が示すとおり、理性中心主義の台頭と共に世界から闇が、人間の暗黒面が駆逐さ

れる動きに拍車がかかった。しかしつとにシェリングは、闇は光と共に歴史を推進する二大原理の一つであることを示した。そして文学において悪は、人間存在の多様な可能性を触発する要因として、善以上に多様な表現形態を得た。それによって魂の領域は飛躍的に押し広げられ、且つ位相を深くしたのである。その推移は、グリム兄弟が蒐集した民話を編集する過程にも示されている。そして光と闇の対立こそがすぐれて生産的なものであることをホフマンは示している。シェリングの『自由論』と私たちの地点との中間にカフカやトラークルがいる。両世界大戦直前のこの二人における「悪」を途上の道標としつつ、戦後生まれのイエリネクにおける「悪」の主題化を射程に入れるとき、極めて集約した形ではありながら、「悪」の文学史を概観することができるだろう。

1. グリムのメルヒェンにおける「悪」の脚色

鶴田 涼子

『グリムのメルヒェン集』は、民話として書き留められた手稿 (1810) から第七版 (1857) に至る約半世紀の間に、加筆修正が行われた。それによって、「文学作品」としての色彩が濃厚になっている。『ヘンゼルとグレーテル』*Hänsel und Gretel* の第七版では、手稿と比較して、子供に対する母親の虚言が大幅に増加している。子供たちにとって、母親が設ける偽りの口実や、嘘、嘘を説明するためのさらなる嘘は、自分たちを騙すという点において、また自分たちの殺害を意図したものであるという点において、二重の「悪」と看做されうる。手稿では母親は、子捨てを提案するものの、騙して取り繕うという性質は示されていない。一方、手稿から一貫して絶対的な悪役を演じている魔女は、動物に近い野蛮な者、子供たちを罵倒する、より恐ろしい存在へと変更される。悪は、編集過程で強化されていく脚色により、いたいけな子供の罪のなさとは対比的に示され、そのような子供に危害を加えるものとして、読者の視点・判断に介入する。悪の脚色は、読者に、特定の行為を担う人間を悪人であると印象付けるのである。母親は、「子捨ての提案」を行ったために「悪役」とされ、魔女と同一視されてきた。しかし、物語内に両者を同定する決定的な証拠はない。母親を悪と看做すか否かは、母親の行為そのものによって決定されるものではなく、むしろ読み手における〈子供〉の捉え方に依拠するものである。

2. E.T.A. Hoffmann und die Dimension des Bösen

Hans Michael Schlarb

Hoffmann hat sich trotz seiner Zuwendung zu den „Nachtseiten“ von Natur und Mensch nicht

auf grundlegende oder gar spekulative Weise mit dem Phänomen des Bösen direkt auseinandergesetzt. Andererseits finden sich v. a. in seinen früheren Werken Figuren, die sich bewusst über das Moralsystem hinwegsetzen oder gar einen Angriff auf die göttliche Schöpfungsordnung unternehmen und damit geradezu als Verkörperungen des „radikal Bösen“ gelten können. Während die zahlreichen Übeltäter in Hoffmanns Werken in der Forschung entsprechende Aufmerksamkeit gefunden haben, ist die Frage, wie Hoffmann das Phänomen an sich erklärt und umsetzt, noch nicht abschließend beantwortet. Wenn auch die Existenz der Übel im Rahmen des romantischen triadischen Geschichtsverständnisses aus dem Abfall von der Natur hergeleitet wird, so ist damit über die konkreten Erscheinungsweisen des Bösen im Bereich von individuellen oder sozialen noch nicht viel gesagt. Destruktives Verhalten erweist sich hier theoretisch gesprochen als Folge einer extremen Form der Vergessenheit der „Duplizität des Seins“, als Verstoß gegen die Forderung, der Welt des „Wunderbaren“ sowohl wie der Alltagswelt die gleiche Berechtigung zuzuerkennen. Dass dies auch auf politischer Ebene gilt, hat Hoffmann später in seiner satirischen Kritik an dem „total aufgeklärten“ Staat sowohl wie in seiner praktischen richterlichen Tätigkeit gegen die verstärkten polizeistaatlichen Tendenzen in Preußen demonstriert. Der Beitrag wird versuchen, diesen thematischen und zeitlichen Bogen nachzuzeichnen.

3. 「悪の増殖」と共に生きること

一カフカの『あるアカデミーへの報告』における権力の問題

山尾 涼

1990年、ボードリヤールは現代的悪の形態がウイルス感染的であると指摘した。我々が直面している悪、つまり行き過ぎた合目的性、均質化への志向と異質なものへの排斥などは、管理不可能な仕方、隣り合う諸項へと感染する。これが悪の現代的形態の「増殖」(Wucherung)の定義である。

カフカの『あるアカデミーへの報告』(1917)では、野生の猿が生き延びるために、文明社会に同化するまでの過程が描かれる。その過程で「文明」は、猿の「野生性」に対して抑圧的、権力的に機能する。猿の本来的な存在のあり方を損なうという意味において、ここでは「文明」はひとつの「悪」として捉えられる。猿は、人間と同じレベルまで文明化されるか、捕獲された猿としての生存かの二者択一を迫られた後、前者の可能性を選び取る。それは文明の求める均質化に同意したしるしであり、その増殖性に加担したのだといえる。

文明化された人間同士の間で感染しつつ、それが猿にまで感染するという架空の設

定において、本作品は悪の増殖性を寓意的に示している。それは、隣接する諸項を取り込みながら、見えない形で増殖を繰り返す。本作品内で描かれている悪の形態は、人間の独自性の喪失、つまり、極端な質的同化の果ての複製化、という今日の文明社会における現実的な問題を、比喩以上の意味で訴えかけてくる。本研究の目的は、カフカが暗に示している、増殖的な悪への真の対抗手段を明らかにすることである。

4. 「情感の内的重力」としてのメランコリー

一トラークルの詩『啓示と没落』に見る悪と狂気

中村 靖子

『人間的自由の本質』(1809)の中でシェリングは、「憧憬の本質」について述べつつ、我々の世界を隈なく覆っているかに見える秩序や規則、形式の根底に潜む「無規則なもの」(das Regellose)こそが、実在性の捉えつくせぬ基底であり、決して消え去ることのない残余であるとす。暗黒は、被造物のいかなる実在性にも先んじており、だからこそ光への憧憬が起こりうる。そして光と暗闇に象徴される二つの原理は被造物においてのみ分離可能となる。そしてただ人間においてのみ、悪はその現象形態を得る。人間とは、善へも悪へも向かいうる自己運動の源泉を等しく己れ自身の内にもち、決定の自由をも与えられつつ、「未決定な」状態におかれた存在なのである。別の論考でシェリングは憧憬を、あたかも「情感の内的重力のよう」であると言う(『シュトゥットガルト私講義』)。そしてハイデガーは、1953年にトラークルの詩作品を論じて、トラークルの詩の形姿(エーリス、訣れを告げた者、夭折した者、狂気に取り憑かれた者等々)の「没落」を、「原初なる幼年時代への回帰」とする。『啓示と没落』(1914/15)において「私」が歩む「夜の小径」は、「神の沈黙」の中でさすらいつつ、没落してゆく行程である。秩序へと回収しきれないもの、善か悪か、光か暗闇かという二分法を前に、割り切ることができずに「残余」するものが、トラークルにおいて「内的重力」のごとく魂を引き寄せる下降の動きを生み出している。人間的自由はトラークルにおいては、引き受けるにはあまりにも重すぎるものとして、憂鬱(Schwer- mut)という形で、その人間的な要素を際立たせたかに見える。トラークルに重くのしかかる「古くからの一族」の古さ、つまり人間という種族が生きてきた年月の長さは、シェリングの自由論(真に自由な出発点の模索の開始)からトラークルの「没落」に至るまでの一世紀の間に凝縮されているかのようである。

5. 「悪」の意識化 — 『トーテンアウベルク』におけるイエリネクの言語的戦略

福岡 麻子

自身の父方がユダヤ系であるエルフリーデ・イエリネク（1946- ）にとって、ナチズムと過去の常なる想起は、問わずにおくことの許されないテーマの一つである。演劇『トーテンアウベルク』*Totenauberg* (1991) では、ハナ・アーレントとハイデガーを彷彿とさせる「女」と「年老いた男」との対話において、過去を想起しようとするベクトルと、忘却を求めるベクトルを対決させている。

とはいえ過去の抑圧のみならず、現在なお社会に残存するナチスの心性こそが作品のテーマであることは、これまでも指摘されてきた通りである。だが、86年のヴァルトハイム事件を契機に「ナチズムの犠牲者」という戦後の自国像を解体してきたオーストリアにおいて、喫緊の問題だったのはナチスの心性そのものだけでなく、消極的な形でそれを受け入れ、意図せず現代におけるファシズムに加担する〈普通の〉人々の意識である。

本論ではアーレントの『イエルサレムのアイヒマン』（1963）に依拠しつつ、心理描写的な展開を持たない〈対話〉、イエリネクの言葉では「言葉の平面」（*Sprachflächen*）を重ねる方法を、個々の人間における思想の欠落を「悪」として意識させる戦略として論じる。そして複数の言語の次元の重なり合いそれ自体が、〈他者〉を排除し〈我々〉を一元化しようとする振舞に抗うものであることを明らかにする。

口頭発表：文学・文化・社会 1（10:00～12:35） C 会場（4階 401）

司会：浜島 昭二、藤井 たぎる

1. 記憶の中の「歴史」

齊藤 公輔

「記憶」はドイツ語圏の文化論において非常にアクチュアルなテーマになっているが、戦争世代消滅を目前に過去記述のあり方が歴史から記憶へと移行しつつあることに伴い、記憶の不正確性が指摘され始めた。映画『ヒトラー —最期の12日間』はヒトラー元秘書の記憶に基づき制作されたものであるが、専門家からは史実との相違が数点指摘されており、記憶と史実との隔たりが浮き彫りになった事例として考えられる。ここに、記憶を保存すればするほど不正確な歴史が積み重ねられる、という対立関係を読み取ることができる。

本発表は、歴史学を集合的記憶の中に組み込むことで、歴史と記憶の対立関係の解決を目指している。歴史を「歴史学の制度」および「歴史学の研究成果」の二つに分類し、それぞれが集合的記憶の枠組みに位置していることを明らかにする。これによって「歴史」は集合的記憶の一形態であることが確認され、記憶保存が不正確な歴史の積み重ねにつながるというジレンマを克服する。

以上の発表を通して、正しい過去を伝達するのではなく、過去を記述するための複数の視点を伝達することこそ現代の課題であると主張する。

2. フィグーラ

アウエルバッハの文献学と歴史哲学

森田 園

エーリヒ・アウエルバッハの文学研究の理論的な基盤である「フィグーラ」(1939/1944)は、ダンテ解釈の基盤を「予型論 Typologie」ないし「フィグーラ」の概念に見出そうとするものであった。『世俗世界の詩人としてのダンテ』(1929)においては十全に解明できなかったダンテの現実描写の根本的なシェーマこそがフィグーラだったのである。フィグーラは、四世紀以降、予型論的解釈——すなわち旧約聖書の出来事を新約における出来事の予型とみなす解釈——の鍵語として、すなわちテュポスの訳語として定着する。アウエルバッハによれば、この神学的な歴史解釈のシェーマを、ダンテは現実表現の媒体として用いる。このような解釈は、ちょうどベンヤミンがバロック悲劇の根源にアレゴリーを見出したのと平行に捉えることができる。フィグーラは『神曲』のいわば「根源」なのである。このことは歴史哲学的な意味を持っている。フィグーラそれ自体が現実の、生の歴史哲学的な解釈を含んでいるが、おそらく、ダンテによって世俗的な現実の解釈のために用いられたフィグーラは、アウエルバッハにとって、生の自己解釈の枠組みとしての(近代の)歴史哲学の起源だったのである。アウエルバッハが到達したのは、このフィグーラに基づく歴史哲学によって解釈された人間こそがヨーロッパ的人間の原像であるという認識にほかならない。そして同時にアウエルバッハの歴史的なまなざしもまたこの歴史哲学の産物なのである。

3. 「人生が私にくれた最高のもの」

テオドール・シュトルム『人形遣いのポーレ』に描かれる帰郷をめぐる

中村 修

『人形遣いのポーレ』(1874)は「現代」の時間的立場に立つ語り手が40年前の記憶を辿り、パウル・パウルゼンより聞いた半生の物語を回想し、多くの教育的・教訓的な要素を含む出来事や決断を検証するかのように再現する物語である。「枠内物語」の主人公パウルゼン親方は同業者組合を代表する名士で、語り手にとっては人生の師であり、同時に世代の離れた貴重な友人であった。人生を達観するパウルゼンはさらに遠い過去を回顧し、「人生が私にくれた最高のもの」をテーマに、少年の語り手に語る。

この作品は長きに亘り、様々な観点から論じられてきた。物語の牧歌性に重点を置いた論考から、芸術家と市民階級の狭間での葛藤を核としたノヴェレとして、あるいは物語の社会的現実性を重視した解釈にまで幅広くなされてきた。その一方で、主人公の成長過程に視点を移し、芸術体験を通して成長する軌跡を主題とし、シュトルムの教育理念が具現された作品とも評される。さらに物語が語られる状況や人物の関係から、若い世代の読者を中心に読まれるべき作品と評価することが妥当であろう。

パウルゼンが経験したことは、語り手の中で40年間温められ、さらに時代の枠組みを越えて語り手から読者の中で生き続ける。そこには道德教育と人間的成長にとって模範となるべき過程が、一つの完成した教育プログラムとして提示されている。本発表では、パウルが人形遣いの父娘と再会し、ともに「帰郷」する物語の後半を中心に、彼の発展と、さらに時代の狭間で変転し、明暗を分ける芸術家父娘の運命について論じてゆく。

4. ハインリヒ・ベルの放送劇に見られる過去との対峙

植松 なつみ

ベルの放送劇に関する研究は少ないが、ベルが放送劇を「ことばと音」の可能性を試す「実験の場」と考えており、小説の対話形式には放送劇の影響が伺える。よって小説理解への足掛かりとして放送劇を検討したい。彼の小説は小市民たちを通して描かれる戦争の無意味さと、戦争の傷跡をテーマとすることが多い。そこで、本発表においても過去が登場人物の眼前に如何に登場し、自身の過去と向き合うことで彼らの内面に如何なる変化が生じるかを考察し、放送劇においてベルが描き出した戦争の傷跡について論じる。

戦後に平穏な暮らしを送る男を主人公とする *Klopfzeichen* (1955) 及び *Sprechanlage* (1962) を取り上げるが、両作品は、不安定な自己の存在を描き、外の世界との関係性を失った「私」をテーマにしているとしてセットで放送された。*Klopfzeichen* の主人公は戦時中の刑務所内で聞かされた壁を叩く音の幻聴に苦しみ、その影響で彼の意識は現在と過去の間をさ迷い、「現在に存在していない」と妻に指摘される。*Sprechanlage* の主人公は、戦時中の恩人に過去の約束を果たすよう迫られた時、約束を誤魔化して、過去を曖昧にしようとする。ベルは主人公たちに〈過去との対峙〉を迫る。不安定な自己の存在に怯える前者の主人公は、過去を告白して受け入れることで解決を試みる。一方で、後者の主人公は過去の受け入れに失敗する。主人公たちの過去の処理方法に着目することで、ベルが、当時の西ドイツ社会の過去に対する姿勢を批判するだけではなく、脅かされる自己の存在を危惧していることが明らかになるだろう。

口頭発表：文学・文化・社会 2 (10:00～11:55) D 会場 (4 階 403)

司会：大庭 正春、糸井川 修

1. クニグ『人間交際術』とベッカー『農民のための救難便覧』

— 同時代批判としての実用書 —

山口 武史

A.F.v.クニグと R.Z.ベッカーは、共に 1752 年生まれの著述家である。標題に挙げたそれぞれの代表作が出版されたのも、同年 (1788 年) だった。しかも両著作は、社会生活の流儀を実践的に指南する「実用書」であり、また広く支持され、数多くの類書の先駆となった点でも一致している。

これだけの共通項を持つクニグとベッカーだが、彼らの著作を比較した先行研究はない。確かに彼らは、身分や社会的立場が異なり、交流が全くなかった。また著作を、前者が市民向けに、後者が農民向けに構想していることも、二人の類似性が看過されてきた一因と考えられる。しかし、ベッカーの『救難便覧』を実際に読んだのは、専ら市民だった。つまり両著作は、同じ読者層に受容されたことになる。そうであるならば、クニグとベッカーが同年に「実用書」を出版したことには、積極的な意味が認められよう。すなわち、同時代の市民たちの問題意識に即応するには「実用書」が最適であると、彼らは考えたのである。

啓蒙主義にとって「実用書」は、旧来の世界観を打破し、啓蒙思想を普及させるた

めの、最も現実的で実効性のある媒体であった。ところがその代表格である両著作は、批判の矛先を、皮相な宮廷社会や迷信的な農村社会だけではなく、啓蒙の担い手たる市民社会にも向けている。「実用書」は、他ならぬ啓蒙市民社会自身が隠匿している非合理を内部告発する手段であり、その意味で究極の啓蒙書と評価される。

2. 「ニーベルンゲンの歌」の重層構造 ―シーフリト像を中心に― 山本 潤

a) 研究対象：「ニーベルンゲンの歌」は、成立当時の受容者にとって既知の口承の英雄詩を素材にとり作品化しているため、そこでは語られることと受容者の記憶にあることが、重層的に存在している。この二つの物語の地平の邂逅は時折齟齬を生み、それは作品内のいくつかの箇所では表層に浮かび上がる。その例として挙げられるのが、シーフリトの青年期の描写である。本発表ではその検証を通し、詩人がどのようなコンセプトのもと口承素材を書記作品化しているのかを考察する。その際 B ヴァージョンと C ヴァージョンの間の差異に注目する。

b) 先行研究との関係：シーフリトの青年期の記述に関し、B ヴァージョンと C ヴァージョンを比較検討しているものにミュラーの研究があるが、やや局部的な解釈に留まり、物語の前後の文脈との整合性を欠いているきらいがある。本発表はミュラーの解釈に批判を加えつつ、俯瞰的視点からこの記述が持つ意味を考察する。

c) 主張したいテーゼ：B ヴァージョンではシーフリトの青年期は宮廷騎士として成熟する過程としての意味を与えられ、素材の段階で彼の本質をなしていたと考えられる英雄的特性は隠蔽される。しかし C ヴァージョンでは改訂がなされ、宮廷的特性のなかに英雄的特性を内包する人物として描かれる。続くハゲネの語りとブリュンヒルトへの求婚の旅を通し彼の英雄的特性は顕在化するが、ニベルンクの国の再征服の際に英雄的特性は宮廷的特性へと収斂する。そこには「ニーベルンゲンの歌」における口承の英雄詩の書記的な領域への導入の姿勢が象徴的に表れている。

3. ルクセンブルクの多言語教育と国民アイデンティティ 田村 建一

ルクセンブルクではフランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語が公用語として規定されており、じっさいこの三言語の使用能力が国民アイデンティティの中核を占めている。学校教育においては、国民語であるルクセンブルク語ではなく、前期中等教育までは主としてドイツ語が、後期中等教育ではフランス語とドイツ語が媒介言語として用いられるなど、多言語能力の育成に重点が置かれている。しかし、近年ルクセン

ブルクにはポルトガルやイタリアなどのロマンス語圏から多くの人々が移住してきたため、その子どもたち（2003/04年度に全児童生徒の36,5%）の多くが初等教育の段階ですでにドイツ語による授業に付いて行けなくなるという実態が明らかにされている。

こうした事態を受けて、現行のドイツ語を媒介とする初等教育と並んで、新たにフランス語を媒介とする初等教育のコースを設け、前者のコースはフランス語を、後者はドイツ語をそれぞれ外国語として学ぶべきだとする改革案がこれまで何度か提起されてきたが、政府の受け入れるところとはなっていない。これは、ただでさえ威信が高いフランス語を媒介とする初等教育の導入が、ドイツ語に頼らない社会集団を国内に生み出し、国民語との言語構造上の近さのゆえに国民全体のリテラシーを担っているドイツ語を将来的には周縁化することが危惧されているためではないかと考えられる。

口頭発表：語学1（10:00～11:55） F会場（2階209）

司会：松尾 誠之、成田 克史

1. 体験話法の識別と翻訳のむずかしさについて

ーリザ・テツナーの『黒い兄弟』を例にー

鈴木 康志

リザ・テツナー『黒い兄弟』の一節である。

⁽¹⁾ Giorgio blieb sitzen und wartete weiter auf Angeletta. ⁽²⁾ Sie kam sonst jeden Abend. ⁽³⁾ Sie würde auch heute kommen. ⁽⁴⁾ Aber sie kam nicht. ⁽⁵⁾ Warum? ⁽⁶⁾ Glaubte sie vielleicht auch, er sei der Dieb? ...

上記の6つの文をみた場合、邦訳は(1)から(6)まですべてを語り手の地の文と解釈している。しかし(3)、(5)、(6)はシグナルから体験話法（ジョルジョの思考の再現）と解釈できる。ただ、(2)Sie kam sonst jeden Abend.はシグナルもなく地の文のようにみえる。しかしこの点をドイツ語母語話者に尋ねると、「不注意な読者は語り手の地の文と読むことがあるかもしれないが、間違いなく体験話法である」とのことである。このように物語テキストでは、一見地の文と見えても、体験話法と解釈できる文がいかにも多くあるかを『黒い兄弟』を例に示してみたい。

次に、このような体験話法の文はどのように日本語に訳したらいいのだろうか？体験話法を地の文のように訳しては、ドイツ語母語話者とは異なった受容になってしまう。また、独自の訳は確かにドイツ語母語話者の読みには近づくが、体験話法の文体的な特色を活かした訳とは言いがたい。今までこの点に関しては、保坂宗重氏のように、主語省略や「自分」の使用などが指摘されてきた。また翻訳の実践として生田春月は、ブーダーマンの『猫橋』に現れる体験話法をすべて日本語としては異質な「彼」で訳し通すという画期的な試みを行っている。さらに最近では三瓶裕文氏が、女性の思考の再現でも女言葉を使わない、作中人物との距離感をもった体験話法の訳し方を呈示している。発表では、これらの研究を踏まえ、体験話法をどのように訳したらいいかについても検討してみたい。

2. ドイツ語における発話上のリズム調整

—母語話者と日本人学習者の比較—

富永 晶子

本発表では、ドイツ語の発話に見られる母語話者と日本人学習者における「音」の調整を比較対照することを通して、「ドイツ語らしさ」の一端について考察する。

外国語学習において、母語による干渉が外国語を発話する行為に影響を及ぼすことは容易に予測される。一方、外国語の学習の積み重ねが母語干渉の程度を制御することもまた推察される。この意味で、学習者の習熟度（年数や留学有無）も調査対象の範囲とする。

「音」の調整には様々なアプローチがある。発表者は、リズム上の調整に関する考察を行うが、その際に、「フット」を単位モデルとする。フットとは、1つの強勢音節を含み、後続に無強勢音節を含む可能性のある「枠」である。フットは2つの枢要な性質を有する。即ち「等時性」と「時間補償」である。前者は、発話を構成する各フット間の時間的長さが概ね均等であるという性質である。後者は、フット内の音節数の増加により、各音節を発話する「持続時間」を短縮し、それにより、フット間の「等時性」を保とうとする傾向である。

先行研究の中には、母語話者が、フット内の音節数の増加分を、強勢音節の「持続時間」を短縮することで補償するとみるものもある。これによれば、「時間補償」は、主に強勢音節に働き、無強勢音節にはさして働かず、さらに、補償が生じる音節数には上限（「限界点」）があるとされる。これらの性質が、リズム調整上、日本人学習者においても認められるかどうか本発表の主たるテーマの1つである。

3. コミュニケーション方略としての「ポライトネス」

一日独語比較対照の観点から

渡辺 学

本発表では、「対人関係の方略」としてとらえることもできる「ポライトネス」が、日独語の言語表現のなかにどのように浮き彫りになるかを、対照ポライトネス研究の活性化を目指しつつ考察する。Brown/Levinson (1978)を嚆矢とし、その修正提案の集積と言ってもいい従来の「ポライトネス」研究においては、たとえば Haferland et al. (Hg.) (1996)に見られるように、術語産出により専門的知見が蓄積される半面、「敬語」、「待遇表現」に代表される言語形式の問題と、相手との（相互的な）親疎関係とそれについての意識の構築・形成、およびそのコミュニケーション方略としての実践の問題が、整然と分けられていないきらいがある。今日的視点から後者を追究するに際しては、「文体、スタイルの選択」、「文体創成 (Stilisierung)」の側面、「心的距離」の隠喩法の内実、さらには、高コンテクスト文化、低コンテクスト文化などの特徴づけに代表される言語コミュニティごとの差異性の精査が求められ、「コミュニケーション・スタイル」に着目した「異文化コミュニケーション (論)」の研究成果の参照もまた有用である。発表では、以上の認識に立って、「TPO に応じた」「規範に沿った」言い方で「ポライト」に相手に接する (滝浦 2008) ための条件を探り、主に日独両言語の談話テキストの事例を手がかりとした比較対照により、「ポライト」や「インポライト」の話し手、聞き手における感知のされ方、「フェイス (体面)・リスク」の (言語ごとの) 温度差の生起点に注意を払いながら事例を分類し、今後の課題を展望する。

ブース発表 (11:30~13:00) G 会場 (2 階 206)

Franz Kafkas Das Schloß in der Verfilmung von Michael Haneke

Hiroaki Murakami

Susanne Schermann

Michael Haneke (geb. 1942) ist einer der profiliertesten Regisseure der Gegenwart. Vor seinem ersten Spielfilm *Der siebente Kontinent* (1989) drehte er seit 1974 mehrere Fernsehfilme. Haneke wechselte danach nicht nur zwischen Fernseh- und Spielfilm, sondern auch zwischen seinen eigenen Originaldrehbüchern und Romanverfilmungen. Trotz dieser Unterschiede, und trotz der manchmal unglaublichen „Treue“ zur Romanvorlage ist dennoch

jeder Film Hanekes an der ihm eigenen Handschrift zu erkennen.

Im Referat von Murakami wird ein Vergleich von Roman und Film gemacht. Der Film *Das Schloß* ist in hohem Maße originalgetreu. Einzelne Szenen werden zwar verkürzt oder zuweilen weggelassen, aber die Texte fast genau so wie im Roman wiedergegeben, und sogar einige von Kafka gestrichene Stellen hinzugefügt. Das Ziel des Referats ist, erstens zu zeigen, wie Haneke Kafkas eigenartige Roman-Welt als Film gestaltet, und dann dadurch die Möglichkeit und die Unmöglichkeit der Verfilmung von Kafkas Text zu überlegen.

Im Referat von Schermann wird auf die Unterschiede zwischen Fernseh- und Spielfilm, auf das Werk Hanekes im Überblick, auf Hanekes Themen und seinen Stil eingegangen werden. Besonderes Augenmerk wird auf dem visuellen Aspekt seines Werkes gelegt werden. An konkreten Beispielen und im Vergleich zu anderen Filmen Hanekes soll gezeigt werden, wie Haneke in den engen Grenzen eines Fernsehfilms seinen Stil umsetzen konnte.

ポスター発表 (13:00~14:30) H 会場 (2 階 205)

(ポスター発表は同時進行です)

・テーマの es の振る舞いとその機能

宮下 博幸

ドイツ語の es は中性名詞を指示する代名詞としての用法のほかに、相関詞としての用法や、非人称構文に用いられるなど、多様な環境で現れることが知られている (Pütz 1986)。本発表では es の多様な用法のうち、(1a) のようなテーマの es もしくは前域の es と呼ばれる es の用法について詳しく考察する。

(1) a. Es hat sich ein Unfall ereignet.

b. Ein Unfall hat sich ereignet.

この es の特徴は、非人称構文に現れる es とは異なり、前域に他の文肢が現れると不要となることである (1b)。これまでの研究では、このような es がどのような環境で使用可能なのか、このような es を使用した場合とそうでない場合にはどのような相違が生じるのかといった問題について、なお十分には論じられていないようである。本発表では、それゆえ先行研究に引き続き、この es の振る舞いをより詳しく明らかにすることを目指す。具体的には、どのような環境でこの es が可能となり、どのよ

うな環境で可能でなくなるのかを、ネイティブスピーカーに対する調査に基づいて示したい。さらにコーパスのデータを用いて、この es を含む文の情報構造が、es の使用にどの程度影響を与えているのかも示したい。さらに以上の調査結果に基づき、この es を伴うことによって生じる文の機能を考察する。その結果この es が、文で表される出来事をコミュニケーションの参与者と関わらない形で提示する機能を持つと論じたい。

引用文献

Pütz, H. (1986): Über die Syntax der Pronominalform »es« im modernen Deutsch. Tübingen: Narr.

・H.フォークラーの『Dir』と Barkenhoff の庭に関する考察

ーヴォルプスヴェーデの画家としての自然観

白川 茜

北ドイツのユーгентシュティールの画家として知られるハインリヒ・フォークラーの19世紀末期から20世紀初頭の作品は、いずれも芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデで制作された。近代化のまだ進んでいないその寒村に構えたアトリエ兼住居 Barkenhoff とその庭に、画家は自らの理想の全てを詰め込み、そこでの生活そのものを作品に反映させた。

1899年に発刊された詩集『Dir』には Barkenhoff をモチーフとした庭が登場するが、この中でフォークラーは庭を訪れる季節の移り変わりを下敷きに、画家自身を彷彿とさせる詩の主人公の愛と生死を描いている。庭という閉ざされた理想の空間を中心として世界が広がっていく詩の展開は、ヴォルプスヴェーデを拠点としながら旅を芸術活動の糧としたフォークラーの人生とまさに重なり合う。

フォークラーは自伝の冒頭にてヴォルプスヴェーデを「die glückliche Insel」と表現しているが、Barkenhoff とその庭が、画家の思い描いていた理想の楽園の具現であったことは彼の作品や手紙などから明らかであり、そこにこそフォークラーの根本的な芸術の思想が込められている。本研究では、『Dir』において愛と生の芽吹く理想の地として描かれた Barkenhoff の庭に焦点を当て、自然と共存した生活こそが理想的な人間の営みであるというヴォルプスヴェーデの中心的人物 O.モーターゾーンの思想とフォークラーの自然への態度とを比較しながら、ヴォルプスヴェーデの中の画家としての彼の姿を考察する。

ドイツ語圏で「謝肉祭」という祝祭を言い表す単語は、代表的なものに限っても Fasching, Fastnacht, Karneval と複数が存在している。これらは実用辞典では、ほぼ同じ言葉の言い換え表現と見なされているが、実際には辞書のレベルよりも厳密な区分が存在するようである。

しかし、実際の使用状況は一般的な方言とも異なるようであり、また歴史的な由来という面では、上記3単語のどれもが比較的古い年代まで遡って使用例を確認することが出来る。さらに、それらの用法は明確には区分されていなかったと思われる時期がみられる。

ここで注目すべきは、19世紀の中盤以降の年代である。この時期にドイツ各地の謝肉祭は大きく変貌を遂げ、地域ごとに異なった特色を打ち出したといわれる。まさにその時期に、謝肉祭を言い表す単語は分離し始めることになった。各地域は、特色に対応するように「自分たちの主催するものは〇〇である」と謝肉祭の名称を決定していった。つまり、地域ごとに異なった形態の祝祭が実施され、それらに異なった名称がついているのではなく、逆にむしろ名称のほうが先に複数存在し、祝祭の地域差が後になって形となった、と言っていいだろう。

今回の発表では、シュヴァーベン地方で実施される Fastnacht を中心に、謝肉祭を代表する Fasching, Fastnacht, Karneval の3種類の単語について、歴史的な由来と地域的な分布、そしてそれぞれの単語が結びついている謝肉祭の姿を紹介することになる。

シンポジウムⅡ (14:30～17:30) A 会場 (4階404)

神秘主義的世界像と自然科学 —もうひとつのモデルネー—

Mystische Weltbilder und Naturwissenschaften – Eine andere Moderne –

司会：福元 圭太、田村 和彦

神秘主義の系譜はおそらく、人間の宗教意識の萌芽にまで遡ることができるであろうが、いざそれを定義しようとするると困難に突き当たる。しかしながら先行研究を導きの糸に、神秘主義的世界像に共通するいくつかの特徴を挙げることは許されよう。

神秘主義的世界像は、ある種の合一への欲求や体験を契機として構成される。すなわち「主客の合一」、あるいは「人間と自然の合一」、さらには「人間と絶対的なるもの、つまり神や最高實在、あるいは宇宙を統べる究極的な根拠といったもの、ないし絶対者そのものとの合一」などが、人間主体の内部において直接体験されることによ

って、神秘主義的世界像が構成されるのである。この「合一」は *unio mystica* と呼ばれる。

我々はただし、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンやエックハルト、ベーメやゾイゼ、シュライエルマッハーやノヴァーリスをとりあげて神秘主義の系譜をたどろうとするのではない。本シンポジウムの目的は、19世紀中葉から20世紀前半のドイツ語圏に現れたいくつかの神秘主義的（もしくは偽神秘主義的）世界像を対象とし、それらを当時の自然科学との関連において定位することで「モデルネ」を別様の光の中に浮かび上がらせることにある。換言すればそれは「モデルネ」が垣間見せる「別の顔」を捕捉しようとする試みに他ならない。

ここでは「モデルネ」を、合理性と計算可能性、実験と観察による検証可能性に基づく実証主義的な自然科学を母胎とする世界観と、一応は定義づけておこう。本シンポジウムでは、神秘主義的な思考法や世界像を、この「モデルネ」に対抗するエゾテラーリッシュなものとしてではなく、「モデルネ」内部に生じた、それを補完する現象ととらえる仮説を立て、4つの事例を通してこの仮説を検討したい。

神秘主義に対する評価は千差万別である。宗教内部においては、神秘主義を宗教の核心へ至る一 과정と見る立場もあれば、逆に宗教こそ神秘主義に至る階梯にすぎないとみる立場もある。また宗教外の理性重視の立場からは、「神秘的合一」は理念としては可能でも、事実としてはそもそも不可能であり、せいぜい情緒的な、精神の一時的な高揚を示すに過ぎないとする立場がある。面白いのは、神秘主義という言葉がすでに、我々の情緒的な反応を惹起することである。承認、否認、あるいは無視、いずれの立場をとるにせよ、神秘主義に対する評価には、評価する側の隠れた本質がそのまま表出される。上田閑照を引けば、神秘主義は我々にとって「一種のリトマス試験紙」である。モデルネを媒介した我々のアプローチにも、それはおのずから現れるだろう。また、シンポジウムに参加する方々にも、神秘主義（あるいはそれを包括するモデルネ）への感応の強弱が現れることになろう。それを契機に活発な議論が展開されることを期待したい。

1. フェヒナーにおけるモデルネの「きしみ」

福元 圭太

心理的なものを物理学的に測定する方法を模索し、両者の関数を導出しようとしたグスターフ・テオドル・フェヒナーが、今日もつばら実験心理学の鼻祖の一人としてのみ記憶されているのは不思議ではない。しかしフェヒナーのこの営み、すなわち「精神物理学」(Psychophysik)の射程は、実験心理学の範疇にとどまることはなかつ

た。

究極的には「魂は物理的に計測できるか」という問いを立てることになったフェヒナーは、実証主義的自然科学の方法論をもって、魂というアモルファスで形而上的な、自然科学ではなく自然哲学に属する、多分に神秘主義的な問題と対峙することになったのである。

敬虔な宗教的環境に育ち、もとより神秘的なものへの親和性をもっていたフェヒナーは、若くして自らの宗教的・神秘主義的な傾向と自然科学者としての「合理性への意志」の間で引き裂かれる。この葛藤の中で精神的・肉体的に破綻したフェヒナーは、4年におよぶ闘病生活から奇跡的な回復を見せたのち、人間、動物はもとより植物、天体をも含む万物が賦霊されていると言う汎神論者＝汎心論者への道を歩むのである。本発表では、自然科学的な合理性が世界把握のパラダイムであった19世紀の半ばに独自の神秘主義的世界像を構築したフェヒナーをとりあげ、フェヒナーその人において体现されているモデルネの「きしみ」を描出してみたい。

2. 生活改革運動と神秘主義 ―菜食主義を中心に―

田村 和彦

世紀転換期の生活改革運動がしばしば疑似宗教的な傾向を示したことはよく知られている。ワンダーフォーゲル運動をはじめとして、菜食主義、衣服改革、FKK、有機農法、舞踏改革、自然療法、郷土保護、予防接種反対運動などは、自然崇拜を根幹に置く「薄められた」神秘主義とみなしうる。それらに共通するのは、近代文明批判、彼岸での救済より現世での治癒や自己救済を重視する実践的性格、グループ内での世界観の共有、そして科学的言説との結びつきである。

菜食主義は単に特異な食餌法というより、この時代に広く実践された生活様式であり、特有の世界観の表現でもあった。それは、自然の理法から逸脱した近代文明（その元凶が肉食だとされる）に対する批判を行うばかりでなく、自然の懷に抱かれて人間が包括的に再生するという疑似宗教的な救済プログラムを根底に置く。菜食は個人のみならず社会秩序全体をも癒す「生」改革なのである。

19世紀後半の菜食主義運動の特色は、世界全体を無生物・動植物を含めた広大な生命世界としてとらえる自然科学的な生命観に基づいていることである。筆頭にあげるべきは、ダーウィニズムとその思想を物活論的・生氣論的汎神論にまで変成させたヘッケルの一元論であろう。彼において科学は「生命」の改革に援用可能なポピュラー・サイエンスになる。

こうした動向はモデルネの文学・芸術にも積極的なかわりを持っていった。（ヴァグ

ナー、ルー・ザロメ、カフカ、さらに、ニーチェ、トルストイ、そしてヒトラー?)
この発表では、肉食主義を例として、生活改革運動における科学的世界観と神秘主義の折衷の様相を明らかにしたい。

3. カール・デュ・プレルにおける科学技術と心霊研究

熊谷 哲哉

カール・デュ・プレル (1839~1899) は、19 世紀末から 20 世紀初頭に、ドイツだけでなく、全世界的にオカルト現象への関心の高まった時期に、在野の哲学者・心霊研究者として活躍し、多くの文学者や思想家に対して影響力を持っていた人物である。

デュ・プレルの心霊研究の最も大きな特徴は、科学的な方法論を用いたことである。彼は、カメラや機械装置を用いて霊媒による交霊術の実験や、夢遊状態の観察などを行い、オカルト現象の解明を試みた。さらにデュ・プレルは、心霊研究だけでなく、進化論的な宇宙史や夢と文学的創造の心理学など、幅広い分野で多くの著作を残している。

デュ・プレルの思想の根本にあるのは、エルンスト・カップの『技術の哲学』における器官投射説、すなわち技術の創造が、人間の更なる進化へとつながるという考えである。これを援用し、デュ・プレルはオカルト現象を解明することが、人間の将来的な進化の可能性を模索することになると考えたのである。

本発表では、デュ・プレルにおいてどのように人間精神への探求と科学技術文明への期待とが結びついていたのかを、彼の独自の心理学（夢遊状態や無意識状態の人間についての探求）を読み解くことで明らかにする。さらに、デュ・プレルの同時代人への影響から、モデルネの別の顔としての、心霊研究と科学技術という側面に光を当てたい。

4. 「メタ心理学の魔女」再考 ―フロイトにおける科学主義と神秘主義―

門林 岳史

ジークムント・フロイトが、そのキャリアの当初、当時最新の神経科学の成果に基づいた実証的な心理学を構想していたことはよく知られている。精神の病の治療に向けた新しい実践および理論として精神分析を確立するにあたって、フロイトは自らの方法を自然科学的な実証性によって基礎づけることを断念した、という理解が通説になっている。もっとも、そのことは、精神分析が思弁的で超越的な形而上学として自らの言説性を構築してきたことを意味しているわけではない。フロイトが常に科学的

な実証主義との緊張関係から精神分析理論を練り上げてきたことは、彼の理論的なテキスト、一連のいわゆるメタ心理学論文そのものに刻み込まれている。

本報告では、精神分析におけるこうした科学主義との葛藤とそれに起因する独特の仕方での神秘主義への接近を、フロイト自身の言葉にならって「メタ心理学の魔女」と呼び、精神分析に内在するそうした傾向を、同時代に出現しつつあった「こころ」をめぐる科学的諸言説の布置全体が抱えていた葛藤のひとつの徴候と捉えたい。そうした立場からフロイトのテキストを再読することで、近代的で脱魔術的な世界観とそれによって駆逐されるべきものとしての神秘主義的世界観という単純な対立図式を越えて、むしろ、科学的実証主義がその限界において見出すもの、その内部における抵抗としての神秘主義の様相を明らかにすることが、本報告の目的である。

シンポジウムⅢ (14:30~17:30) B会場 (4階405)

Konzepte für einen nachhaltigen Deutschunterricht: Zur Konstruktion von reichen Lernumgebungen im Tokai-Raum

Moderation: Alexander Imig, Tomoko Okochi

Dieses Symposium versucht zu zeigen, wie die deutsche Sprache und der mit ihr verbundene Deutschunterricht gesellschaftlich wirken kann. Den Ansatzpunkt bieten Vernetzungen, die in den letzten Jahren im Tokai-Raum geknüpft wurden.

Die Nutzung japanischer Traditionen des Deutschunterrichts spielt hierbei eine besondere Rolle. Dies soll im ersten Vortrag, besonders an „gasshukus“, Wochenendseminaren, gezeigt werden. Verschiedene gasshukus werden vorgestellt, auch das seit 2003 durchgeführte Wochenendseminar „Tokai-Deutsch-Wochenende“. Aber nicht nur das zeitlich intensive Lernen, auch die dauerhafte Vernetzung mit dem deutschsprachigen Europa spielt eine besondere Rolle für die Schaffung von reichen Lernumgebungen. Die in allen Teilen Japans ansässigen Japanisch-Deutschen Gesellschaften sind nicht nur Organisatoren von Deutschkursen, auch die vorhandenen Kontakte nach Deutschland helfen das Deutschlernen zu unterstützen, was der 2. Vortrag dokumentiert. Bezüge in die deutschsprachigen Länder werden aber auch durch curriculare Standards hergestellt, die einerseits helfen die Fähigkeiten von Lernern besser zu beurteilen, andererseits aber japanische Curricula transparenter machen können. Ein wichtiges Beispiel hierfür ist die ÖSD-Prüfung, deren Einsatz auch

Auswirkungen auf den Unterricht haben kann und sollte, wie der 3. Vortrag zeigt. In der Prüfungstheorie spricht man dann von einem Washback, etwa im Bereich von Lernstrategien (Grotjahn 1997). Der darauf folgende Vortrag (auf Japanisch) bildet eine Brücke zwischen Europa (Deutschland) und Japan. Vorgestellt wird eine praktische Umsetzung des Tandem-Ansatzes und seine Auswirkungen auf den Unterricht. Unter Lernen im Tandem versteht man die Zusammenarbeit von 2 Lernern im Team, wobei in der Regel jeder Lerner seine Muttersprache unterrichtet. Es gibt Präsenzstandems, bei denen die Lerner an einem Ort sind, wie dies hier der Fall ist, und Tandems, die mittels elektronischer Medien durchgeführt werden. Wichtig ist aber besonders die Auswirkungen solcher Tandems auf die Motivation und auf den Spracherwerb der Lerner zu erfassen, um die didaktische Umsetzung den Erfordernissen der Lerner anpassen zu können. Diese Reflektion ist Aufgabe des Vortrags. Im letzten Vortrag werden die Kernpunkte zeitliche Intensität, Kontakte nach Deutschland und Lernstandards noch einmal konzentriert unter dem Oberbegriff „Vernetzung“ dargestellt. Dies ist einerseits ein abstraktes Konzept und der theoretische Rahmen der Veranstaltung. Besonders wenn man in Europa das Bedingungsfeld des japanischen Deutschunterrichts vorstellen will, braucht man abstrakte, theoriegeleitete Konzepte. Die Beschreibung des „Bedingungsfeldes“ ein Begriff aus der „Berliner Didaktik, welcher die Unterrichtssituation und die entsprechenden Rahmenbedingungen in einem Modell zeigt (vgl. Steinmetz 2000) ist notwendig um deutschen Fachdidaktikern theoriegeleitet die japanische Situation des Deutschunterrichts zu vermitteln. Dies ist die Intention dieses Vortrags in Bezug auf die Theorie des Deutschunterrichts in Japan. Andererseits wird dieses Konzept praxisorientiert auf das Tokai-Netzwerk bezogen, welches den Kristallisationspunkt für die Vernetzung im Tokai-Raum, aber auch zwischen dem Tokai-Raum und anderen Gebieten darstellt. Mit folgendem Link können notwendige und vertiefende Informationen aufgerufen werden:

<http://www.geocities.jp/dlinklist/DE/DinJ/JGGHerbstSymposium09.html>

zitierte Literatur

Grotjahn, Rüdiger (1997), Strategiewissen und Strategiegebrauch. Das Informationsparadigma als Metatheorie der L2-Strategieforschung, in: Strategien und Techniken beim Erwerb fremder Sprachen, Rampillion, U. / Zimmermann, G. (Hrsgg.), München
Steinmetz, Maria (2000), Fachkommunikation und DaF-Unterricht, Vernetzung von Fachwissen und Sprachausbildung am Beispiel eines Modellstudienganges in China, München

1. Wochenendseminare als Lernform

Sven Holst

Wochenendseminare oder -kurse sind eine Lernform, die von universitärer, interuniversitärer und privatwirtschaftlicher Seite angeboten werden.

In Wochenendkursen kann intensiveres Lernen erwartet werden. Mittels vermehrten Unterrichts auf einen engen Zeitraum beschränkt, soll ein besseres Lernergebnis erzielt werden. Natürlich stellt sich die Frage, ob damit nicht die Aufnahmefähigkeit der Lernenden überfordert wird.

Ein wichtigeres Argument für Wochenendseminare für Deutsch in Japan ist das Ziel, eine einigermaßen authentische Sprachumgebung zu schaffen. Daher soll durch mehrere Muttersprachlerinnen und Muttersprachler, verschiedenen Unterrichtsformen, Rahmenprogramm ect. der Kontakt zur deutschen Sprache auf verschiedenen Sinnesebenen intensiviert werden und damit ein intensiveres Lernen ermöglicht werden. Ein Problem ist, mit welcher Konsequenz dies, besonders bei Anfängergruppen, durchgesetzt werden kann und soll. Es wäre zu evaluieren, in wie weit sich die Fähigkeiten der Teilnehmenden nach einem solchen Wochenendseminar verbessert haben.

Eines der wichtigsten Argumente für Wochenendseminare ist der Motivationsschub, der durch Kontakt zu vielen verschiedenen Muttersprachlerinnen und Muttersprachlern, fortgeschrittenen Lernenden und anderen Lernenden auf ungefähr der gleichen Spracherwerbsstufe und zu verschiedenen, bisher so nicht erfahrenen Aspekten Deutschlands und der deutschen Sprache erzielt wird. Zu diskutieren ist die Frage, ob und wie sich dieser erzielte Motivationsschub dann in der japanischen Lernumgebung um- und fortsetzen lässt.

In dem Vortrag soll auf Vor- und Nachteile dieser Lernform, sowohl für Lernende und wie auch für Lehrende, eingegangen werden.

2. Deutsch nicht nur an der Universität: Die Rolle der Japanisch-Deutschen Gesellschaften bei Sprachkursen, Kulturvermittlung und Austauschprogrammen

Oliver Mayer

Die Japanisch-Deutschen Gesellschaften (JDG) in Japan sind – wie die Deutsch-Japanischen Gesellschaften (DJG) in Deutschland – wichtige Kulturvermittler zwischen beiden Nationen. In diesem Referat wird am Beispiel der JDG Nagoya dargestellt, welche Veranstaltungen eine JDG durchführt, wie Sprachkurse organisiert sind und welche Stellung die JDG im bilateralen

Kulturaustausch hat. Der Referent ist seit knapp 20 Jahren in verschiedenen Gesellschaften aktiv tätig, u.a. war er Präsident der DJG Dortmund von 1998 bis 2001 und leitet die Sprachkurse der JDG Nagoya seit 2004.

Die Teilnehmer an den Sprachkursen der JDG Nagoya lassen sich grob in zwei Gruppen einteilen: Einerseits junge Leute unter 30 Jahren, vor allem Frauen, die oft längere Zeit in Deutschland gelebt haben, andererseits Rentner, die während ihres Studiums Deutsch gelernt haben und diese Sprachkenntnisse nach mehr als 40 Jahren wieder aktivieren. Im Referat werden die Lernerbiographien einiger Sprachkursteilnehmer vorgestellt.

Die Sprachkurse der Japanisch-Deutschen Gesellschaften spielen – gemeinsam mit den anderen von ihnen durchgeführten Programmen, vor allem dem Jugendaustausch – eine wichtige Rolle für einen intensiven Kontakt der Teilnehmer zu deutscher Kultur. Die Vernetzung mit den Universitäten in der Region kann verbessert werden, um das Potential der JDGen auch für Studenten zu erschließen und die Lernumgebung in Japan damit ein wenig attraktiver zu gestalten.

3. Aspekte von Prüfungen und Unterricht.

Das Österreichische Sprachdiplom Deutsch (ÖSD)

Olaf Schiedges

Sprachprüfungen wie das Österreichische Sprachdiplom Deutsch (ÖSD) haben in den letzten Jahren einen höheren Stellenwert bekommen. Die Standardisierung von Sprachbeherrchungsstufen und die Festlegung von Lernzielen durch Sprachbeherrchungsprojekte wie dem Gemeinsamen europäischen Referenzrahmen für Sprachen (GER) haben zu dieser Entwicklung beigetragen.

Das ÖSD verfügt weltweit über mehr als 200 lizenzierte Prüfungszentren. In Japan gibt es 5 Zentren. Seit der Gründung des Prüfungszentrums in Nagoya im Jahre 2007 können auch in der Region Tokai international anerkannte Deutschprüfungen angeboten werden.

Im ersten Teil des Referats wird zunächst das Prüfungssystem vorgestellt, dessen sprachtheoretische Grundlage der handlungstheoretische Ansatz des Fremdsprachenlehrens und -lernens ist. Das Ziel der Prüfungen, die sich an den Niveaubeschreibungen des GER orientieren, ist es, die Sprachkompetenz der Deutschlerner im Hinblick auf reale Verwendungssituationen zu messen und zu bewerten.

Der zweite Teil geht auf den Zusammenhang zwischen Prüfungen und Unterricht ein. Das Prüfungsangebot wirkt sich positiv auf die Arbeit mit den Deutschlernern aus. In Form einer

Prüfung A2 Grundstufe kann man den Lernern z. B. mittelfristig erreichbare Ziele anbieten. Lehrende, die als ausgebildete Prüfer des ÖSD tätig sind, verfügen über Modellprüfungen, Einblicke in Beurteilungskriterien und Informationen über die Anforderungen in den einzelnen Aufgaben. Nicht nur relevanter Wortschatz und Themen, sondern auch wichtige Lerntechniken sowie erforderliche strategische Kompetenzen können so in den Unterricht mit einfließen.

4. タンデムプロジェクトの実践報告 コース設計とその成果 大河内 朋子

2005年度から毎夏、Japanologie 専攻学生（4学期修了者）と、第二外国語としてのドイツ語履修学生（1～4年生）との間で、タンデム形式による1週間の言語コースを実施してきた。本報告では、5年にわたるタンデムプロジェクトに関して、まずコースの概要とドイツ語教材の推移ならびに授業評価アンケートの集計結果を紹介し、次いで、参加学生のその後のドイツ語学習状況や短期留学（語学研修を含む）志望状況なども踏まえて、タンデムコースの成果と問題点について整理しておきたい。

プログラムは5年間ほぼ変わらず、日帰り遠足、2日間の教室活動、2泊3日の合宿から構成されている。他方、ドイツ語教材はアンケート結果に基づいて毎年修正され、現在では実用性の高い基本的表現の練習が中心になっている。タンデム期間中に実際に使える表現や語彙を学習することが、学生のモチベーションを高めるからである。

5年間で19名のリピーターがいることに証明されるように、本プロジェクトに対する満足度は常に高い。その要因や学習成果などについて、次のような結論を導きうる。

- (1) 高い評価を生み出す主たる要因は、異文化交流の楽しさにある。
- (2) 客観的に観察できる学習成果として、発音の改善と相づち表現の習得を挙げることができる。しかし、それ以外の学習成果は期間中に顕在化しにくい。
- (3) 短期留学等への動機付けにはなりにくいが、次年度の本プロジェクト参加を目的にしてドイツ語学習を継続する学生は少なくない。

5. Vernetzter Unterricht

Zu einem didaktischen Paradigma für den Deutschunterricht in Japan

Alexander Imig

In diesem Vortrag geht es darum vorhandene Strukturen (ÖSD, Gasshukus und die Rolle der Japanisch-Deutschen Gesellschaften) paradigmatisch zusammen zu fassen. Dafür wird die Metapher des Netzwerks benutzt, die aber, sowohl praktischen als auch illustrativ-erklärenden

Charakter hat.

Die Netzwerk-Metapher ist in der Lage Lernprozesse auf verschiedenen Ebenen begrifflich, grafisch und theoretisch darzustellen. Es handelt sich dabei um komplexe Prozesse, die nicht einfach als Ursache-Wirkungs Zusammenhang dargestellt werden können. Es sind Lernprozesse von dieser Art, die oft mit dem Begriff „Kultur“ bezeichnet werden. Insofern ist die Netzwerk-Metapher eine Verbindung von Sprachunterricht und Kulturunterricht. Praktisch sind Netzwerke als Internet-Seiten zu beschreiben. Die praktische Nützlichkeit von Internet-Seiten, die zu dem Zweck der Vermittlung landeskundlicher Inhalte geschaffen worden sind, leuchtet zuerst intuitiv ein, was allerdings nicht heißt, das genauere quantitative oder qualitative Untersuchungen nicht noch differenzierte Ergebnisse erbringen können.

Ausblick: Eine dichtere Verknüpfung des Netzwerks, sowie eine Intensivierung der Forschung in Bezug auf interkontinentale Netzwerke wäre wünschenswert. Darauf soll im Zusammenhang mit verschiedenen Beispielen eingegangen werden.

口頭発表：文学・文化・社会 3（14:30～17:05） C 会場（4 階 401）

司会：柴田 庄一、関口 裕昭

1. フランツ・カフカのもう一つの<アメリカ>

インディアン像の変遷をてがかりに

林寄 伸二

同じ女性との二度目の婚約の1ヶ月後で、カフカが咯血に見舞われた1917年8月初頭、彼の人生の節目となる時期である。その咯血直前の日付で、彼は「アメリカ政府がインディアンたちに対する最後の戦争を行わなければならなかった時代」という19世紀的な設定の断片を書き遺している。この設定は、アメリカを舞台としながらも、カフカのアメリカ小説『失踪者』1912-1914の「20世紀的な」アメリカ像とはかけ離れているだけに、幾分奇異に思えよう。しかし、この断片が示すように、カフカにおいては、現代的なアメリカ像によってインディアンの躍動する19世紀的なアメリカ像が完全に淘汰されるというようなことはなかった。

本発表では、これまで手付かずだった『失踪者』以後にも範囲を広げてカフカのインディアン像の変遷を追跡し、とりわけ1917年のカフカがわずかに書き遺した19世紀的なアメリカのイメージには、シオニストが目指す自由の土地としてのパレスチナが重ねられていることを論じる。カフカの古きアメリカ像への回帰は、当時の彼のシ

オニズムへの接近と並行関係にあるように思われる。

バルフォア宣言以前とはいえ、今日から見ればその政治的含意も無視できない上述の断片はしかし、喫緊の結婚問題も絡み合い、カフカ自身の葛藤を反映しているようだ。そしてその内攻する葛藤は、アメリカ版『訴訟』と言うべき作品として生長する前に、咯血という形で身体に出口を求めたのであろう。

2. 表象としての「病」と「女性」 —カフカ『田舎医者』を手がかりに

寺田 雄介

本発表ではまず『田舎医者』と「病」の文化史との関係を検証する。患者である若者は一見病気には見えない。それはまるで当時カフカを蝕んでいた結核の症状を投影しているようである。結核は、身体と精神を同時に蝕む病であった梅毒やアルコール中毒とは異なり、患者特有のか弱い身体や青白く透き通るような肌が、ロマン主義以降美の一つの典型とまで見なされていた。ところが改めて若者を診察すると脇腹に大きな傷が見つかってしまう。この場面では、流行病の変遷と医学の発達により過渡期にあった病の美と醜の概念が、交互に登場していると考えられるのである。

続けて「病」と「女性」の関係を検証する。この患者はベッドの中で上半身裸のままバラ色（ローザ）の傷口を医者と隣接させている。カフカの作品においてベッドという題材は随所に見られるが、ここでは男性である医者とは異次元にある女性的存在を暗示していると言えよう。この時代に描かれた女性はヒステリーを患うことがしばしばあった。ヒステリーとは痙攣や虚言癖などを表す疾患だが、性的、倫理的逸脱の原因もまたそこにあると信じる者も多かった。狂気と発作に襲われて無防備に自らを晒す女性の姿は、男性の蔑みのエロスの一端であるとも解釈できよう。

「病」と「女性」、この両者の有縁性から『田舎医者』を読み直すことで、当時の文学を包んでいた時代背景、またそれを超越したカフカの異質性を見いだすことが期待できるのである。

3. W・ベンヤミンのカフカ・エッセイ

「反転」のモチーフが描く布直

小林 哲也

本発表では、ヴァルター・ベンヤミンのカフカ論（とくに1934年の「フランツ・カフカ」）に見られる「反転（Umkehr）」のモチーフの意義を明らかにする。この「反転」はベンヤミンのカフカ解釈において決定的に重要なものだが、これまでの研究で

は——Kramer, Deuring, Honold などベンヤミンのカフカ論に焦点をしばったものであっても——十分に読み解かれてきたとは言い難い。

「反転」には様々な意味が込められているが、差し当たり文明の袋小路状態からの方向転換として理解できる。閉塞状況の中で途方に暮れるカフカのうちに「反転」の動きを見てとるベンヤミンは、そこに或る種の退行的なものを認めている。この退行的なものからフモールや快活さをとり出してくるベンヤミンの見方は非常にユニークなものである。そこには、例えばアドルノやドゥルーズ／ガタリ、あるいはショーレムのカフカ理解にも見られない、ベンヤミン独特の思考法がある。ベンヤミンのカフカ理解における「反転」のモチーフの意義は、ショーレムのカフカ解釈を参照項とすることで、さらに鮮明に理解できる。1910~20年代のベンヤミンとショーレムの関係（Guerra などの先行研究を参照）も踏まえると、両者のカフカ解釈の差異は、実践的姿勢の差異と相応していることがわかる。発表では、こうしたことを明らかにしつつ、ベンヤミンの思考の展開の中で「反転」がもつ意義を見極めたい。

4. ベンヤミンとティリッヒに見る文化神学の可能性

宮城 保之

ベンヤミンを巡る様々な解釈のうち、神学的なものは一つの潮流をなしている。第一にはショーレムを始めとするユダヤ神学的解釈が挙げられるが、ベンヤミン自身が生前様々な立場の神学に関心を示したことにより、彼の神学も一義的な把握を許さないものとなっている。そうした状況を鑑みつつ問いたいのは、いわゆる<文化の神学>に対して彼の仕事を持つ親縁性と相違である。この術語はティリッヒの講演『文化の神学の理念について』（1919）によるものであり、ここで彼は制度的な宗教から解放された文化の中に宗教的なものの実現を見てとり、そのような観点からの文化考察を文化の神学の課題としている。これは世俗化された文化の神学的正当化という近代プロテスタンティズムの課題に発するものであるが、これと距離をとりつつも同様な問題意識によって活動していた当時の知識人のうち特にベンヤミンの関心はティリッヒのそれに通じる点がある。両者共にいわゆる宗教芸術よりも当時の前衛芸術に一種の啓示を見出した。また特にその際、形式を通じて現れる内実に関心が払われた。そしてティリッヒは象徴を「宗教の言語」と見なし、ベンヤミンと同様、高次な役割をそこに認めていた。

本発表ではベンヤミンとティリッヒによる文化神学の課題と問題点を比較検討し、それが今日の文化学に対して持つ意義をも明らかにすることを目標とする。

1. Indefinitheit - Korpus-Untersuchung zu „man“ und blossen Plural

Maria Gabriela Schmidt

Die beiden sprachlichen Ausdrücke „man“ und der „bloße Plural“ werden grammatisch ganz gegensätzlichen Bereichen zugeordnet. Dennoch haben sie eine Gemeinsamkeit auf der satzsemantischen Ebene, die der Indefinitheit. Dieser Vortrag möchte nun diesen Aspekt der Indefinitheit auch in einen pragmatischen konkreten Kontext, dem des muttersprachlich-kognitiv-konzeptuellen Spracherwerbs, stellen. Deshalb soll das abstrakte Konzept der Indefinitheit, das in der linguistischen Literatur auch Ambiguität oder Unterspezifikation genannt wird, hier an einem sprachlichen Korpus untersucht werden. Als Textkorpus möchte ich zunächst zwei bekannte Werke *Räuber Hotzenplotz* von Ottfried Preußler sowie *Jim Knopf und Lukas der Lokomotivführer* von Michael Ende aus der deutschen Jugendliteratur heranziehen, um an den entsprechenden Textstellen das Phänomen der Indefinitheit zu erläutern und gleichzeitig zu zeigen, dass „man“ und „der bloße Plural“ diese hier postulierte Gemeinsamkeit zeigen. Dazu zwei Textbeispiele:

(1) *Wenn er lachte - und das tat er oft -, sah man in seinem Mund prächtige weiße Zähne blitzen.* (Jim Knopf S.6)

(2) *So etwas ist äußerst unangenehm für uns Postboten!* (Jim Knopf S.11)

An dem Beispiel von „man“ und der „bloßen Plurals“ kann gezeigt werden, dass bestimmte sprachliche konzeptuelle Begriffe nicht an Wortarten oder an grammatischen Formen an sich festgemacht, sondern allein auf Grund ihrer satzsemantischen Aufgabe bestimmt werden sollten.

2. 品詞転換要素としての動詞接頭辞 —授与・装備動詞派生の歴史的変遷—

黒田 享

現代ドイツ語には, *bezuschussen* (< *Zuschuss*), *bedachen* (< *Dach*)のような「授与」や「装備」を表す名詞からの転換動詞(以下, 「授与・装備動詞」)があるが, その多くが接頭辞を伴う。その中には**zuschussen* や**dachen* のような対応する接頭辞を伴わない形式の存在が確認できない動詞が多数含まれ, その場合の接頭辞の位置づけが語形成

論上の問題になる。

先行研究でよく言われるように、接頭辞が[*be-*]_{N-en}_Vのような非連続的派生要素の一部であると想定し、その空所に名詞が挿入されることによって[*dach*]_N → [*be-dach*]_{N-en}_Vのような転換が起こると考えれば**dachen*のような動詞は存在する必要はない。ただ、*ehren* (< *Ehre*)のような接頭辞を用いない「授与・装備動詞」の転換も観察されるので、[*dach*]_N → *[[*dach*]_N-en]_V → [*be-[[dach]_{N-en}*]_Vのような二段階派生も考えられる（この場合、**dachen*のような中間段階は実際には形成されていることになる）。

「授与・装備動詞」は古高ドイツ語期においてすでに存在していたが、現代ドイツ語に至るまで接頭辞を伴う形式が常にかかなりの部分を占めてきた。本発表では9世紀前半のドイツ語および現代ドイツ語における「授与・装備動詞」の使用実態の調査結果を基に、中高ドイツ語と初期新高ドイツ語についての先行研究の成果を援用しつつ、「授与・装備動詞」の形成手段として接頭辞を含む非連続的要素が主要なものになっていくドイツ語史上の流れを示し、現代ドイツ語における「授与・装備動詞」の構造とその背景、ドイツ語史における位置づけについて考察する。

3. 文体的効果をもたらす(不)定名詞句の選択

—Thomas Mann の „Tristan“ をもとに—

住大 恭康

物語における定・不定名詞句の使い分けに関しては、物語世界内に新たな対象を導入する場合に不定名詞句、すでに導入された対象を指示する場合に定名詞句が使用されると一般的にいえるようである。ところが、文学作品等ではこの原則にあてはまらない事例が少なからずみられ、そのような場合には当該の名詞句の機能に基づいて文体的な効果をもたらされると考えられる。例えば、定名詞句は同定可能な対象を指示する際に使用されるため、その指示対象が物語世界内に導入されていなければ、当該の対象が „familiar“ であるはずの物語世界の内部に読者が引き込まれることになる。また、定名詞句は当該の記述によって指示可能な対象を包括的に指示する際に使用されるため、その指示対象が間接的に同定される場合には、参照点となる対象のスキーマや物語世界における常識が推論される。さらに、不定名詞句は物語世界内に位置づけられていない対象を指示する際に使用されるため、その指示対象は（すでに物語世界内に導入されている場合にとりわけ強く） „fremd“ であると感じられる。なお、 „familiar“、 „fremd“ といった指示対象のステータスは当該の対象を記述する視座となっている人物に依存するが、その差異は場面の表象や人間関係の認識にも影響すると考えられる。

第2日 10月18日(日)

シンポジウムⅣ (10:00～13:00) A会場 (4階404)

カフカと劇場 Kafka und Theater

司会：西 成彦

これまでフランツ・カフカと「劇場」との関連は、主に次の二つの点で論じられてきた。

一つは、カフカが実生活において劇場やヴァリエテ、サーカス、映画館などに通いつめていた点である。特にカフカは、俳優の身振りを強調する即興的なイディッシュ演劇から強い影響を受け、それが『判決』以降の創作手法と作品内容の変化に現れているというのが、Beck (1973) によって提示され、広く受け入れられてきた考えである。もう一つはカフカ作品の演劇的な構造についての言及である。カフカは、『失踪者』の「オクラハマ劇場」をはじめ、短編集『断食芸人』のように劇場やそこで演じる登場人物たちの姿を描いた作品を残している。このような点については、Benjamin (1934) がカフカ作品を「世界劇場」として捉え、登場人物の身振りに注目していることは周知のとおりである。また Emrich (1957) は、作中において人物間のやりとりが芝居のようであることから、『訴訟』中の出来事を「喜劇」として捉えることができるとしている。

この二つの研究の流れは、従来あまり接点を見いだされることはなかった。本シンポジウムでは、そのように個別に行われてきた研究を総合するため、演劇、芝居、舞台など多義的な意味を持つ言葉としての「劇場 (Theater)」を中心に据え、ダンスや演劇のみならず広く社会的現象を対象とするに至った近年のパフォーマンス研究の成果を取り入れる一方、演劇研究の枠内には収まらない「劇場」的要素をカフカ文学に求める。

まず、カフカが体験した劇場的メディアとしてのイディッシュ演劇と映画とを取り上げ、カフカ文学との関係を考察する。カフカの生きた時代とは、従来のテキスト中心の演劇からパフォーマンス自体を重視した新しい演劇への変化の過渡期であり、イディッシュ演劇と映画は、いずれもそのパラダイム転換と関わりの深いメディアであった。そのようなカフカの接していたメディアが作品に与えた影響について論じていく。続いて、カフカ作品の内容に重点を移し考察する。カフカ作品には、劇場やそれ

に類似した「場」があり、そこで身体的パフォーマンスを行い、「見世物」となることを選択する人物たちが見られる。そのような人物の系譜を短編作品の初期から後期までたどっていくことで、作品における視線の問題を明らかにしていく。また長編小説『城』では、物語は「見る／見られる」関係の強調された場としての「劇場的世界」において展開していく。その中で人物間、あるいは組織と人物との間で交錯する視線がどのように権力関係を媒介しているかについて考察を行う。最後に、カフカ作品が演劇性を持つことを踏まえた上で、その特徴とは演劇化を困難にする要素にもなりうることを、『訴訟』とその劇化作品との比較を行うことで検証していく。

以上のような問題をそれぞれの発表者の立場から論じ、議論していく中で、カフカと劇場との関係を明確にしていくことが本シンポジウムの目的である。

1. 身体表現の発見

—カフカが観たイディッシュ演劇における身振り—

佐々木 茂人

カフカ研究においてイディッシュ演劇は、カフカにユダヤの伝統を垣間見せ、伝統と断絶した「西方ユダヤ人」の自覚を促し、『判決』(1912)成立に多大な影響を与えたと評価されてきた (Beck 1973, Baioni 1984, Robertson 1985)。近年この見解に対し、イディッシュ演劇はハスカラ (ユダヤ啓蒙主義運動) の産物、すなわちユダヤ版近代市民劇であると反駁する向きもある (Lauer 2006)。この見解からすると、イディッシュ演劇は『判決』成立とも無関係とされる。

だが、そもそもカフカがイディッシュ演劇に「ユダヤ性」を感得したのは、その舞台の「即興性」、とりわけ「低俗芸術 (ShUND)」と称されるジャンルで演出された身体表現においてであった。本発表は、その身体表現の特性をカフカが最初に観劇したラタイナー (じっさいはシャルカンスキー) の『背教者』 (1907) を手がかりに読み解く。

「低俗芸術」の『背教者』の台本と日記の比較から明らかになる舞台上のパフォーマンスは、同時代の身体表現文化を取り込んだモダニズム的な身体表現である。言語表現と身体表現との拮抗、演じる者自身を前景化する身振りは、カフカに「書く」という行為とのアナロジーで捉えさせ、パフォーマンスとしての執筆への転換を迫ることになる。イディッシュ演劇の舞台で観た身体表現は、『判決』において完成を見る理想的な執筆法をカフカにもたらしたのである。

2. 『失踪者』における「劇場」と映画的なもの

川島 隆

若きカフカは、舞台芸術へ関心を寄せる一方、映画という新メディアに強く魅せられていた (Zischler 1996)。彼の一部の作品には、明らかに映画からの影響が認められる。特に第一長編『失踪者 (アメリカ)』(1912-1914)は、初期の映画芸術との関わりを強く示唆される作品である (Jahn 1965, Alt 2009)。ただし、この作品の全てが映画的なものとの親和性から説明されるわけではない。本発表では、『失踪者』における映画的な表現手法と、作品中に描かれた「劇場」のイメージとの間の緊張関係に光を当て、これをカフカの創作手法の転換という観点から考察する。

『失踪者』のうち、1912年に書かれた部分においては、主人公の身体の動きを即物的に描く、映画を思わせる手法が多く見られるのに対し、1914年に追加された「オクラハマ劇場」の章では、むしろ寓話的な要素が強く出ている。この創作スタイル上の変化は、世紀転換期のモダニズムの身体文化・視覚文化に根ざした(映画的)手法からの離脱であると同時に、社会の中の人間のありかたを寓話的に凝縮して提示する脱身体的な表現方法への移行として特徴づけられる。アレゴリー的な「オクラハマ劇場」の章で描かれる「劇場」の形象は、この転換を画するものである。

3. あえて見世物になるということ

—断食芸人の系譜—

藤田 教子

フランツ・カフカは他者からの視線に敏感であり、他者に対しても鋭い観察眼を持っていた。観客の視線を一身に集める俳優や芸人たちを、克明に観察し、多くの作品に登場させている。観客は、無数の他者である。映像の中で一方的に役割を演じる映画俳優とは異なり、見世物となる芸術家、芸人には、絶えず観客の視線がつきまとう。本発表においては見世物をめぐる作品、『祈る男』(1904)、『ある学会への報告』(1917)、『断食芸人』(1922)の主人公たちを、あえて見世物になるという性向を持つ断食芸人の系譜と位置づけ、その形象が、作品中でどのように表現され、変遷しているのか検討する。

カフカの作品における他者からの視線(G. Neumann 1996)や、他者の役割(Born 2005, Žerebin 2005)についてはすでに論じられており、Bauer-Wabnegg(1986)は、メディアがカフカに与えた影響を指摘しているが、今回は作品中におけるメガホンなどのメディアの役割が、行為者と、観客である他者との相互理解のための媒体としてではなく、障害としても、作用している点に注目する。他者から注目を浴びる華やかなショーの

主人公たちは同時に晒し者でもある。芸術家、芸人が他者の視線により晒し者と化してゆくこと、そしてその延長線上にある相互理解の困難な状況を示唆し、そのことが他者の拒絶という主題に発展して最終的に短編集『断食芸人』に結集されていることを提示したい。

4. 観察者の観察

—フランツ・カフカ『城』における対立する視線—

下 菌 り さ

本発表はカフカの作品が持つ「劇場」性を〈見る／見られる〉関係に求め、視線が作り出す関係をもとに長編『城』(1922)を分析する。

Beissner(1952)の指摘以後、カフカの作品における語り手の視線はしばしば問題にされてきた。しかし作品に浸透しているのは語り手の視線だけではない。登場人物たちもまた視線が作り出す関係の中に身を置く。すなわち、支配する視線と支配される観察対象という関係である。城による村の支配は、村の観察そして観察結果の記録という形をとって現われる。よそ者である主人公 K. も城の観察する視線から逃れることはできない。しかしながら、K. と城との関係は単に〈見る〉城と〈見られる〉K. という関係にはおさまらない。K. は自身を観察する城を〈見返す〉まなざしを持つ。Alt(2008)はカフカの初期短編小説に登場する主人公たちの多くが遊歩者であることを指摘しているが、そこでの遊歩者とは観察者の謂に他ならない。K. もまた遊歩者＝観察者の系譜に属する。彼は村を歩き回り、城に関する人々の言説を収集することによって、権力の中心にあって到達不可能な城の姿を浮かび上がらせようとする。つまり K. は城を観察する主体であると同時に城によって観察される客体であり、そしてまた城も K. を観察する主体であると同時に彼によって観察される客体なのだ。双方向の視線が交錯し、一方向的な舞台化が不可能になっている『城』の世界を、作品の内実に即して明らかにしてゆく。

5. 『訴訟』の中の「劇場」とその翻案の問題

—カフカの『訴訟』とヴァイスの戯曲『訴訟』との比較を手がかりとして—

須藤 勲

カフカの『訴訟』(1914)には芝居を思わせる描写や台詞、身振りが見られる。Emrich(1957)は『訴訟』を、喜劇であり現実でもあるという両義的世界として捉えており、Rother(1995)も『訴訟』に芝居の要素を見ている。一方でこの『訴訟』の持つ演

劇性は、一方では演劇や映画への単純な翻案を拒む要因にもなりうる。その原因としては、作品に内在する芝居の構造や、「視点の一貫性」(Beissner 1952)、ドラマ性の欠如(M. Walser 1968)などが挙げられる。しかし『訴訟』の翻案は幾度もなされており、それは劇化の困難性を乗り越える試みと位置づけることができる。

本発表では、小説『訴訟』の演劇性が劇化を困難にするものであると仮定したうえで、ペーター・ヴァイスの戯曲『訴訟』(1974)を一例として取り上げることで、実際の劇化作品との比較を行う。ヴァイスの『訴訟』については、原作との比較の中でメディア間での翻案の問題が扱われてきたが(Gronius 1983, U. Zimmermann 1990, Heyde 1997)、今回は原作に内在する演劇性がどのように舞台において表現されているかについて論じていく。その際、ヴァイスの設定する段状の舞台やその使い方に注目し、それが原作の持つ劇場の世界を視聴覚メディアにおいて表現しようとする試みであると捉え、考察を行う。

シンポジウムV (10:00~13:00) B会場 (4階405)

「文意味構造」の新展開 ―ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望― Neue Entwicklungen der „Semantischen Satzstruktur“: Aktuelle Perspektive auf die Linguistik des Deutschen und weiterer Sprachen

司会：成田 節、藤縄 康弘

複数の語を文に結び合わせるプロセス(=文法)にも意味があることは、文の意味が個々の語の意味から構成されることとともに、Frege の重要な(再)発見だったが、表現形式を意味に対して独立的に組織されるものと見なす性向の強い生成文法のような理論言語学では、ときに忘れられがちでもある。他方、Frege を生んだドイツでは、生成文法の受容は、格とともに θ 役割が省みられるようになる GB 理論になってようやく本格化した。それ以前からこの理論を推し進めてきた人(例えば Bierwisch や Reis)は、同時に意味論研究への貢献が少なくない。また、わが国においても、関口存男の「意味形態」に代表されるような、意味論中心の文法研究が逸早く行われてきた。ドイツ語学とは、洋の東西を問わず、意味の分析から形の秩序を捉えようとする学問であるように思われる。

とはいえ、この20年ほどの間に意味論的アプローチは、もはやドイツ語学の専売特許ではなくなっている。確かに、Wunderlich や Stiebels, Ehrlich や Rapp などドイツの

研究者が、文構成の要となる動詞の意味を有限個の下位関数の組み合わせに分解する手法で成果を上げているものの、同様のアプローチはこの間、他言語でも、Jackendoff の「意味構造」、Goldberg の「構文文法」、影山らの「語彙意味論」など、同時多発的に出現し、しかも当該言語の枠を超えて影響力を有するに至っている。

翻って、わが国のドイツ語学界はどうか。2001 年以降、叢書化されたシンポジウムの一覧を見る限り、文法への意味論的アプローチを正面に据えた企画はなかったようである。これは、80 年代後半、在間らによって「文意味構造」が、上述の海外の動向に先んじて提唱されたことを想うと、やや意外な観がある。在間らは、個々の動詞の語彙的意味を横断するかたちで DO や CAUSE などの構文的意味を定式化し、一見同じ構文が異なった価値を持つことや、ひとつの構文が規則的に他の構文に拡張される際の可能性と限界などに光を当てたのだが、その後、日本のドイツ語学は、こうした関心をどこまで深化させることができたのだろうか。また、今後どのような展開の可能性があるのだろうか。

本シンポジウムでは、このテーマを論ずるべく、意味論的な立場から文法を見詰めてきたドイツ語学および他言語の研究者 4 人がパネリストに立つ。各発表の詳細は、以下の要旨を参照されたいが、全体を通じて、語彙的意味と文法的意味の境界の問題や、構文と意味の一対多・多対一対応の問題、命題の内と外の関係などが焦点となるだろう。さらに、「文法と意味」のような言語学の一般的関心事について、ドイツ語以外の研究者を交えて議論することは、ドイツ語学の成果をより多くの目で検証するだけでなく、より開かれたものにするということにも繋がっていくであろう。

1. 意味構造と項構造 —基本関数の認定とその複合をめぐる— 藤縄 康弘

文意味構造の研究は、どのような基本関数がどのように組み合わせられ、どのように特定の構文として具現するのかが原理立てて説明するという目標に向かって、経験的にアプローチを重ねていく営みである。これら諸課題のうち、最初の「どのような関数」という点については、過去 20 年ほどのあいだに CAUSE (使役) を代表とするいくつかの基本関数が認知されてきた一方、最近ではまさにその CAUSE が、DO (動作) & BECOME (変化) の複合にほかならず、それ自体は基本関数でないとする還元論も提案されている (Wunderlich 2000)。いずれの立場が妥当なのかは、基本関数が「どのように組み合わせられ、どのように特定の構文として具現するのかが」という上述の他の課題とも密接に関連する。

そこで本発表は、現代ドイツ語を対象にこうした問題を論じることで、構文と意味を

テーマとする本シンポジウムへの導入とする。具体的には、動作動詞の意味と目的語の格 (er unterstützt mich – er hilft mir)、移動動詞における sein 支配と非人称受動の両立 (er ist ins Bett gegangen – es wird sofort ins Bett gegangen)、自由な与格 (ein Vogel ist in den Wald geflogen – eine Fliege ist mir in die Suppe geflogen) の3つを取り上げる。基本関数の複合が関わるこれら広範なケースには、通常の並列的な & が一様に有効であり、還元論が前提とする非並列的な & は必要ない。この確認を通じ、基本関数としての CAUSE を再認識する。

2. 「欠如・欠落」の概念と与格の実現

—「存在」・「所有」概念との接点を探る—

高橋 亮介

本発表では、「欠如・欠落」を表す与格動詞 *fehlen, mangeln* を主な研究対象とし、その項実現および意味特徴に対する統一的な把握を試みる。日本語の「～が～に {ある・いる / 欠ける・欠落する}」、ドイツ語の *et. {ist / gehört / fehlt / mangelt} jdm.* という構文的並行性が示す通り、「存在」・「所有」を表す動詞と「欠如・欠落」を表す動詞の間には意味的・統語的な関連性が見出される。影山 (1996) および竹内・乾・藤井 (2006) は、「いる・ある」と「欠ける・欠落する」がおおよそ反義であるとし、これら動詞を [x BE AT y] 型の語彙概念構造で統一的に特徴づけ、反義関係を付随的な否定関数 NOT の有無に帰している。上に示した二言語間の並行性に基づくならば、*sein, gehören* と *fehlen, mangeln* の異同も [x BE AT y] および NOT の有無に帰されるのだろうか。本発表ではこの可能性を検証し、NOT の仮定が *fehlen, mangeln* の文法的振舞いを適切に捉えられないことを論じる。そして、*fehlen, mangeln* が、*sein, gehören* とは別に *regnen* などの天候動詞とも文法的に並行であることを指摘し、*fehlen, mangeln* に対して BE AT の第一項位置が変項付きの定項 <LACK>(x) で充足された語彙概念構造を提案した上で、その妥当性を示す。

3. 日本語における対格の生起と「関与」の概念

—「被影響 (affectedness)」をキーワードとして—

今泉 志奈子

Burzio (1986) の一般化が示すとおり、日本語においても、典型的には、外項に意図性の高い動作主を選ぶという動詞の意味特性と対格の生起が連動するが、同時に、例外的に見える現象も多数存在する。「健が熱を出して倒れた」における他動詞「出す」は、意味的には、「(健は) 熱が出た」における自動詞「出る」に近い。「預ける」「見

つける」などの一部の他動詞は、自動詞化形態素を伴い動作主を抑制しても、依然として対格が残る（「客が受付係に貴重品を預けた」／「受付係が（客から）貴重品を預かった」）。動作主を抑制しても対格が残るという特性は、「被害の受身」と呼ばれる間接受動との関連で論じられることが多いが、本発表では、「直接受動文と間接受動文の違いは、被害感の有無ではなく、主語が、動詞のあらわすできごとと直接関与しているかどうかにある」という郡司・坂本（1999）等の指摘に着目し、変則的に見える対格の生起においては、一貫して、個体（＝主語）と構文があらわすできごととの関係性を規定する「関与」の概念が重要な役割を果たすことを主張する。具体的には、「関与」の概念を形式的に捉えるための方策として、被影響の関数 *AFFECTED* を仮定し、動作主の抑制と対格の生起という意味と形式のミスマッチが生じるしくみを明らかにするとともに、日本語における様々な構文の意味の共通性を指摘することで、ドイツ語における文法現象に新たな角度から光をあてるための材料を提供したい。

4. フランス語再帰構文の諸相 —モダリティーを中心に—

春木 仁孝

フランス語の再帰構文受動用法は、主語の特性を表す。（*L'eau de cette source, ça se boit.* (The-water of this fountain, it Refl. drink) 「この泉の水は飲める」）英語と違い、フランス語では副詞要素の無い受動用法も多い。共起する副詞要素も、難易度、達成度を表すものだけでなく、手段や主語の様態（例：「白ワインは冷やして飲むものです」）、また潜在的動作主の態度・感情を表すもの（例：「この本は楽しく読める」）も生起する。受動用法としてよく挙げられる「売る」を用いた文には曖昧性がある。進行形がないフランス語では「この本はよく売れる／売れている」を形の上では区別出来ない。同じイベントが複数回繰り返されること（量）により、主語の指示対象の特性（質）が作り出されると考えると、受動用法と自発用法は意味的に密接な関係にあるのが分かる。さらに受動用法を転化的非人称にするとイベントを表すようになるが、潜在的動作主はさらに背景化されて現象としてのイベントを表す。受動用法には、可能モダリティーを示す中間構文タイプと規範モダリティーを示すタイプが存在するが、多くの場合構文上にはモダリティーをマークする要素は存在せず、動詞の意味構造、副詞要素、さらには社会的規範や慣習に関する知識、百科辞典的知識などに由来すると考えられる。以上のような特徴を持ち、いわゆる中間構文の範囲に収まらないフランス語の再帰構文受動用法を検討することで、ドイツ語の現象を考える上での新たな視点を提供できれば幸いである。

口頭発表：文学・文化・社会 4 (10:00～12:35) C 会場 (4 階 401)

司会：福山 悟、四ツ谷 亮子

1. 「捏造」とはなにか ニコラス・ボルン『捏造』論

柘刈 博樹

Nicolas Born (1937-1979) の Roman, 『捏造』Die Fälschung (1979) について論じる。

主人公 Laschen はハンブルクの雑誌の特派員として内戦下のバイルートに赴く。この物語設定の枠組からすれば、タイトルに言う「捏造」は、まず戦争ジャーナリズムにおけるそれを示唆するはずだが、実際のテキストは、そのような意味での「捏造」だけをテーマにしているわけではない。この狭義での「捏造」もちろん問題にはなるが、その占める割合は予想外に低く、また、作品全体が「捏造」的なるものを巡って展開されているにもかかわらず、その「捏造」の概念は、一読して明快なものではない。

この作品では、主人公の私生活における人間関係のあり方の問題と、内戦の現場における報道の問題とが重なり合うような仕方で提示され、「傍観者」の位置にあるものの苦悩を起点にしつつ、その「当事者」化への欲求あるいは誘惑を契機にした動きが描かれており、その全体が「捏造」なるテーマの多面的な反映となっている。

本発表では、先行研究における基本的な諸モチーフおよび物語構造の分析を踏まえ、上記「捏造」概念の特性についてより詳細な考察を加え、1. この「捏造」概念は非「捏造」的なるものを許容しないこと、2. 「当事者」化に伴う暴力は「傍観者」的的日常にすでに潜みつつ「捏造」の成立条件となっていること、などを明らかにする。

2. 戦後ドイツ文学はなぜ性を語ら(れ)なかったのか

K・テーヴェライトの「ポカホンタス論」に触れながら

越智 和弘

娯楽性の欠如というドイツ文学の歴史的特性を支えてきたのが、プロテスタント的禁欲の精神だとすれば、20 世紀後半期にその伝統に変化が起きることを期待する方が無理なのかもしれない。しかしそれでもなお、戦後ドイツ語圏の文学史を性の観点から見直すことには、いまだ触れられていない意義がある。

ひとつは戦後文学が外国、とりわけアメリカを中心とした戦勝国文学の模倣から再出発したことに由来する。そうした国々の文学では、娯楽性やラブ・ストーリーが中心的役割を果たすのは至極当然なことであった。さらに 50 年代から 60 年代にかけて、性描写により発禁あつかいされてきた D・H・ロレンスや H・ミラーらの小説がつぎ

つぎと合法性を獲得していく。娯楽性の輸入と性表現の解禁は、ドイツの文学的伝統にどう影響したのか。A・シュミットの小説『ボカホンタスのいる湖の風景』と K・テーヴェライトの「ボカホンタス論」から、この問題を掘り下げる。

さらに重要なのは、性的抑圧を自らの精神的下部構造と把握し、その解放を強く求めた 68 年学生運動世代と文学の関係である。この問題は男性作家よりも、独自のセクシュアリティの奪還を目指し立ち上がった 70 年代以降のフェミニズムを経た女性作家たちに、より顕著に反映されているように思える。ただ男性的言語と女性的官能性の激しい葛藤の中から生まれた文学は、はたして性を恐れ快楽を忌み嫌う禁欲の伝統を打破しえたのか。E・イエリネクや U・ハーン の作品を例に考えてみたい。

3. ヒルシュビーゲル『エス』試論

—もうひとつの近代への希望—

木本 伸

本発表はヒルシュビーゲル監督『エス』の作品解釈を目的とする。この映画の中心をなすのはケルン大学による心理実験である。主に映画は大学医学部の地下に設けられた模擬監獄を舞台に展開する。大学の公募に応じた被験者は二十六歳から四十二歳までの男性二十一人。選考の基準は、あらゆる意味で平均的な市民であること。つまり実験の開始時において、この模擬監獄は現存する社会を正確に映し出すような顔ぶれで構成されていた。一方で実験を主催する教授たちは地下一階のモニター室から、つねにことの推移を観察している。そして彼らの予想通り、看守と囚人に分けられた被験者たちは支配と被支配の心理的機制を発達させていく。ところが、その展開は科学者たちの予想を大きく越えて流血の惨事へと至り、ついには外から事態を眺めていた彼らさえも暴力の波に飲み込まれていくのである。この作品で善良な市民が暴力的な支配者へと変じていく過程は、多くの観客に人間に対する絶望的な思いを与えたようだ。そのため多くの批評は「暗い作品」という一面的な評価に終始している。しかし全体主義の経験を劇場で反復することだけが、この映画の動機ではなかった。絶望を克明に描き取るところには、すでに絶望を受け止める希望の力が働いているからだ。それは暴力なき共同体の夢に他ならない。この暴力なき共同体の夢は、劇中に挿入される海とカモメのイメージによって表現されている。発表では、この海とカモメのイメージを手がかりとして、「暗い映画」に込められた希望の意味を読み解いていきたい。

4. Momente interkultureller Wissensvermittlung in den Kriminalromanen von Günter ZORN unter besonderer Berücksichtigung nonverbaler Elemente

Elke Hayashi

Interkulturalität tritt in allen Momenten der zwischenmenschlichen Begegnung, auch unerwarteten, auf. Jeder Mensch wird täglich damit konfrontiert, über die Massenmedien, Internet, in persönlichen Gesprächen, oder durch Beobachtungen während eines Feriaufenthaltes etc.

Eine wichtige Quelle für interkulturelle Beschreibungen stellt die Literatur dar. Deren einziger Sinn und Zweck besteht vielfach genau darin, interkulturelle Andersartigkeit hervorzuheben und für die Nachwelt festzuhalten (z.B. Reiseliteratur), aber auch in anderen Literaturgattungen wie Kriminalromanen, die im Ausland spielen (z.B. bei Günter Zorn oder Gert Anhalt in Japan). In diesen Kriminalromanen enthaltene interkulturelle Beschreibungen erfolgen zum Teil sehr direkt und mit der Motivation interkultureller Aufklärung der Leser, die Japan noch nicht aus eigener Anschauung kennen. Daneben wird mit indirekten Erläuterungen bereits bestehendes landeskundliches Wissen aktiviert. Die Darbietungsform beeinflusst die Leserwahrnehmung, wobei die Story in ihrer Gesamtheit einzelne kognitive Momente des nonverbalen Unverstehens zu kompensieren vermag.

Inwieweit berücksichtigt der Autor nonverbale Momente der Kommunikation als Stilmittel zur Darstellung der Romanhandlung? Welche Schlüsse bezüglich inter„kultureller“ Verhaltensunterschiede lässt eine Analyse solcher in literarischer Form dargebotener Beschreibungen zu? Dieser Beitrag soll es leisten, diesen Fragen anhand der Kriminalromane von Günter ZORN unter interkulturellen Gesichtspunkten nachzugehen, wobei auch die Frage nach der Auslassung bestimmter Bereiche zu stellen sein wird.

口頭発表：文学・文化・社会 5（10:00～12:35） D会場（4階403）

司会：清水 純夫、山本 順子

1. 『若きヴェルターの悩み』と教養小説

林 久博

「人生経験を積んで次第に成熟する」(Dilthey)ことが主要テーマである教養小説 (Bildungsroman)に『ヴェルター』が数え入れられることはこれまでほとんどなかった。

しかしヴェルターは、一般的な教養小説の主人公たちが辿る道を途中までは経験している。それ故に彼は教養小説の主人公の「挫折例」であると言ってよい。

今発表の目的は「挫折例」である『ヴェルター』を一連の教養小説群（『修業時代』、『晩夏』、『緑のハインリヒ』、『魔の山』）と比較し、自殺する主人公と、生き残っていく主人公の分岐点を明らかにすることにある。まず教養小説の概念規定を行い、次に「成熟」のためにヴェルターに不足していたものが何であったのかを、(1)「主人公の芸術に対する態度」と、(2)「主人公に対する他者の介入」に焦点をあてて考察する。(1)に関して、他の教養小説の主人公たち（例えば「美しき魂の告白」を読むマイスター、「菩提樹の歌」に対するカストルプなど）が芸術の虚構の世界に浸りきることがないのとは対照的に、ヴェルターは芸術作品に自我を没入させていく。例えばそれはホメロスやオシアン之歌に対する彼の態度に表れている。(2)に関して、教養小説の主人公たちには必ず「救い手」（ナターリエ、ユーディットなど）が登場するが、ヴェルターには誰の救いの手も届かない。これも決定的な相違点である。

本発表では最終的に、この「挫折例」の考察を通じて、最初に行った教養小説の概念規定を補完する。

2. なぜゲーテの『音響論』は未完に終わったか？

滝藤 早苗

ゲーテは音楽を『音響論』という形で自然科学の側面から把握しようと試み、『色彩論』にならぶ自然科学論文を執筆する予定でいた。『音響論』の中心課題の一つに短調をめぐる問題があるが、彼は長調と短調の平等性を主張しようとして、なかなか納得の行く答えに辿り着けなかった。そのため、親友の音楽家C.F.ツェルターや遠縁のC.H.シュロッサーに、たびたび意見を求めた。晩年ようやく、ゲーテはこの問題に一応の結論を見出したが、結局『音響論』を完成させることはできなかった。多くの先行研究では、こうした友人たちとの議論によって、彼の見解がどう変化したかということに焦点があてられた。

しかし、『音響論』はなぜ図式的な草案にとどまったのだろうか。例えば短調をめぐる問題に限っても、彼の主張は、短調の存在意義を守ろうとするあまりに、感覚的経験や人間心理に頼るところが多く、主観と客観のバランスを欠いている。また彼によれば、短調は「名状しがたい憧れに満ちたもの」を表現するために自然が人間に授けた贈り物であるというが、このような調性観は当時としては新しく、ロマン派の音楽観とも通じるものがある。その一方で、彼はロマン派の感傷的な音楽に理解を示さず、この点においても理論と実際に矛盾がある。従って、今回の発表で主張したいのは、

彼の見解にみられるこのような数々のアンバランスこそが『音響論』の完成を妨げたのではないかということである。

3. アイヒェンドルフへのアプローチの可能性

—アドルノとアーレヴィンの観点の違いを手がかりに—

水守 亜季

従来のアイヒェンドルフ研究には、独特の偏りが、つまり「同一性」を前提として彼の文学を読み解く傾向がある。本発表はこれを R.アーレヴィンの「風景論」の影響によるものと捉え、その上で従来の研究を打開する糸口として、同時期の論考にも拘わらず等閑に付されてきた Th.W.アドルノのアイヒェンドルフ論を取り上げる。「非同一的なもの」をめぐる展開するアドルノ論を援用しながら、本発表は仮にここで〈irre〉なるものと呼ぶ要素をアイヒェンドルフ文学の核心として提示する。

彼の作品においては、「セイレーン」の歌を表現する二義的な「irre Töne」、つまり「惑い、惑わせる音」という言葉が、詩人存在を連想させる「吟遊詩人」の歌をも表現する。表現主体として現れる「吟遊詩人」の歌が、〈irre〉なるもの、「非同一的なもの」とみなされるとき、この表現主体はもはや同一性を保持してはいない。このことは、アイヒェンドルフ自身が批判する「主観性」の問題と関わる重要な点であるが、それにも拘らずほとんど看過されてきた。それはアーレヴィンやそれ以降の研究の主流が、あるものを表現する確固たる「私」の存在、その「同一性」を無前提的に認めるからである。

これに対し、確固たる「私」が放棄され、「非同一的なもの」となるところにアイヒェンドルフ文学の独自性を見て取るアドルノのまなざしこそ、本発表が試みるアプローチを可能にする観点である。

4. ミヒャエル・エンデのゲーテ『メルヒェン』受容

—シュタイナーによる解釈との関連を中心に—

川村 和宏

ゲーテの『メルヒェン』は、シラーの求めに応じて雑誌『ホーレン』に掲載された『ドイツ避難民閑談集』の最後の挿話である。本発表では、未公開のミヒャエル・エンデ直筆書簡等を調査した結果に基づいて、エンデが『メルヒェン』を受容した経緯について検討する。

エンデとゲーテの関連が論じられる機会はこれまで少なかった。書簡を見ても、エンデはゲーテに関する会議への参加を拒まれており、生前からエンデ作品とゲーテと

の関連に関する理解が十分ではなかったことが窺われる。だが、エンデ自身は、これに対して「皆と同じようにその枢密顧問官殿に多くを負っている」と反論を送り、他の書簡でも度々『メルヒェン』に言及している。

そこで、本発表では、エンデが『メルヒェン』に言及する際、ルードルフ・シュタイナーの著作に特徴的な表現を用いている事実に着目し、エンデの『メルヒェン』受容がシュタイナーによる解釈を経由したものであると主張する。そして、これを裏付ける資料として、『メルヒェン』とシュタイナーの社会三層化思想を関連づける内容を含む、エンデが所持していたメモを取り上げる。最後に、シュタイナーによる『メルヒェン』解釈の特殊性を批判的に指摘し、シュタイナーの解釈を介さないゲーテとエンデの共通点についても検討した上で、ゲーテの『メルヒェン』に端を発する錬金術思想が、エンデの社会観、ひいては貨幣論への取り組みへと継承される系譜を示す。

口頭発表：ドイツ語教育（10:40～12:35） F会場（2階209）

司会：林田 雄二、今井田 亜弓

1. Vernetzte Welten - Chancen und Grenzen internetgestützter Lehr- und Lernprozesse im DaF-Unterricht

Oliver Bayerlein
Rüdiger Riechert

Vor allem für die Auslandsgermanistik hat das Internet mit seinem Zugang zu aktuellen, authentischen Materialien schon ab Mitte der neunziger Jahre neue Möglichkeiten für das Fremdsprachenlernen eröffnet. In Zeiten des Web 2.0 ergeben sich neben Aspekten des Materialtransfers inzwischen mit der Umsetzung projektorientierter Ansätze (wie etwa Podcasting-Projekte, E-Portfolios oder Schüler-Blogs und -Wikis) didaktische Perspektiven, die sowohl aus lerntheoretischer Sicht – Förderung autonomer Lernprozesse – als auch aus mediendidaktischer Perspektive den Unterricht Deutsch als Fremdsprache bereichern.

Folgende Thesen werden den Vortrag strukturieren:

1. Lerntheoretische Erkenntnisse der Gehirn- und Spracherwerbsforschung können durch projektorientierte Nutzung des Internets im DaF-Unterricht didaktisch besonders sinnvoll umgesetzt werden.
2. Der Einsatz von Lernumgebungen (LMS) ist didaktisch nur begrenzt sinnvoll.
3. Der globalisierte Gebrauch von social software allein ist kein Indiz für

Projektfähigkeit und medienkritische Kompetenz von Lernern.

Der Vortrag erfolgt auf dem Hintergrund einer rund 15jährigen Erfahrung in der Konzeption und Durchführung von Internet-Fortbildungen für Deutschlehrkräfte an Schulen und Universitäten sowie eines Forschungsprojektes, das an der Nanzan, Seikei und Keio Universität in Verbindung mit dem IKK Düsseldorf durchgeführt wird.

2. Internetgestützte Videokonferenzen, ihre Probleme und deren Beseitigung

Andreas Riessland

Tatsuya Ohta

Dieser Beitrag ist Bestandteil einer Untersuchung zum Gesprächsverhalten bei japanisch-deutschen Videokonferenzen. Als Arbeitsgrundlage dient der Mitschnitt einer neunzigminütigen Videokonferenz zwischen Studenten des Fachbereichs Deutsch der Nanzan-Universität in Nagoya und des Lehrstuhls Modernes Japan der Heinrich-Heine-Universität Düsseldorf, im Frühjahr 2009 zu gleichen Teilen auf Japanisch und Deutsch durchgeführt.

Aufbauend auf die Ausführungen zu Organisation und Durchführung internetgestützter Videokonferenzen im Rahmen des DaF-Unterrichts bei Grasmück (2004) beschäftigt sich dieser Beitrag mit einer der Auffälligkeiten beim japanisch-deutschen Austausch vor der Kamera: der Verwendung von Gesprächsstrategien, die vom Sprecher als Stütze der Verständnissicherung intendiert sind, sich in der Anwendung aber kontraproduktiv auswirken. Als Beispiele zu nennen wären dabei:

- das ungetübte und damit ermüdende Ablesen vorformulierter Beiträge,
- der Einsatz von Sprechmitteln, die sich an der akademischen Diskursebene der eigenen Muttersprache orientieren und die Gegenseite überfordern,
- die Erläuterung eines vom Gegenüber nicht verstandenen Ausdrucks durch Rückgriff auf sachlich akkuratere, dabei aber sprachlich deutlich anspruchsvollere Sprechmittel.

Anschließend soll die These zur Diskussion gestellt werden, dass die für viele Teilnehmer ungewohnte Sprechsituation vor Kamera und Bildschirm den vermehrten Einsatz derartiger Strategien eher begünstigt. Es soll aber auch aufgezeigt werden, dass gezielte Schulung der Teilnehmer im Vorfeld der Veranstaltung dazu beitragen kann, diesen Tendenzen effizient

vorzubeugen.

Grasmück, Markus (2004). Videokonferenzen im DaF-Unterricht – Ein Bericht über die bisherigen Erfahrungen am SFC der Keio-Universität. *ドイツ語教育* 9 (57), 93-102.

3. ユビキタス社会における外国語学習環境

Ubiquitous Computing und Fremdsprachenlernen

藁谷 郁美、太田 達也、Marco Raindl

自律的な学習能力や学びに対する意識を高めることも視野に入れた外国語学習を考えると、学習者が必要な情報やツールにいつでもアクセスできる環境を整えると同時に、学習者にとっての「生活の場」がそのままそうした「体験学習の場」となり得るような環境を構築していくことが望ましい。こうした考えのもと、発表者は「ユビキタス体験連動型学習支援環境」の構築に取り組んでいる。これは「その時」「その場」でもっとも必要な教材が学習者の持つ端末に自動的に提示・配信されるシステムで、これにより「生活空間における実践的体験学習環境」の構築が可能になる。「今」「ここ」の状況での生きた経験と外国語学習を直接結び付ける学習環境は、教室におけるシミュレーションを越えた実社会への橋渡しを実現するのみならず、言語の生きた機能に目を向けた学習者を育て、自律的な学習能力や実生活の中での社会的な「学び」の能力を促進するのに有効であると考えられる。なお、同様の実践的研究例はこれまでに例がなく、本研究が最初のものとなる。

Intelligente Alltagsgegenstände kommunizieren über mobile Netze, erkennen Orte, Gesichter und Situationen und verhalten sich dementsprechend. Diese Vision für die Zukunft der Informationsverarbeitung beschreibt das Schlagwort *Ubiquitous Computing*. Erläutert werden soll, wie schon heute mithilfe mobiler Medienträger und Verfahren der Positionsbestimmung Lernumgebungen geschaffen werden können, in denen Sprachenlernen stärker in den Alltag der Lernenden integriert und über eine Analyse ihres Verhaltens auf ihre individuellen Bedürfnisse zugeschnitten ist.